

先天の天理、又は神明とも申してをる。其の良知の中、良能ありて、本と天地易簡の智能と一物である。決して朱子のごとく心と理と別つべきものではない。虚靈にして一なるものであつて、一靈一性、一知て、天を生じ、地を生じ、又仁をも生じ、義をも生じ、禮智をも生ずるの主宰であると致してをる。此に至つては、全く太虚と同一に宇宙の本體、世界の實在としてをるので、辨別すべきものではない。とにかく吾人には此の太虚、此の良知が本來固有せられてをるものであるから、聖人の良知たる「易」「詩」「書」「春秋」等の四書六經に依りて、以て各自の良知を致すべきである。之れにつきては後天の人欲を生ずる弊源、邪障たる「知覺」「明見」「情識」「意見」の四知を掃ふて、誠意慎獨、可もなく、不可もなく、適もなく、莫もなく、惟義是れ従ふの妙用、神通自然に手に入るやうにしなければならぬ。かの鬼神といふも、この良知のことにして、「何ぞ別に鬼神あらんや」と曰ひ、又「夫れ心の神は他にあらず、太虚一團、靈氣の人の方寸に入るもの、孟子の所謂良知なり」とも曰ふてをる。若し其の處に到達すれば、敢て後天の人欲を奪ふに足らず、之れとて自然に其の正に歸すとさへ考へてをるのであります。

太虚 天 心 聖人

良知 無極の眞 心の精神 先天の天理 神明 鬼神

萬事萬徳の本源

〔理氣合一論〕。中齋は又王學に據つて理氣合一の説をも主張し、朱子に反して、先天は理のみ、而して氣、其の中にある、後天は氣のみ、而して理、其の中にある、要するに理と氣と一にして二、二にして一なるものなり、又後天より之れを視れば、則ち理と氣と當に分つべきに似たり、先天にありては、固より理氣の分つべきなしと曰ふてをる。つまり理氣は一躰に含有せられをるものにして、本來各自其の身に併有してをる所であつて、實に天地と徳を同らし、陰陽と功を同うするのである。此の如きは聖賢のする事であるけれども、吾人も能く孟子や程子のいふてをる形色天性、心理が一なるの説を信じて、獨りを慎み、虚に歸し、以て無極の眞を喪はざれば、太虚即ち吾人、吾人即ち太虚、眞に此の境に臻れば、則ち萬千の世界概ね其の心中にありといふ有様に居ることができると論じてをりまして、誠に能く王陽明の直截易簡なる眞面目を發揮してをります。

〔性善欲惡論〕。又人の性善なりとの孟子の説を以て、何人にも良知の具備せざる

なきよりして断定せられたる確論にして、萬世に冠たるものと爲してを。かく
 人性は本と善であるが、物其の外に誘はるれば、則ち偃々然化して悪となり了はつ
 て、人は存すといへども善はないやうになるのは、どういふわけであるといふに、之
 れは人には軀殼ありて之れがために氣質あり、之れよりして私欲を生ずるに至つ
 て方寸の虚を掩ひ蔽してをるからである。故に人は學問して、以て其の氣質に私
 欲を生ぜしめないやうに變化せなければならぬ。苟くも人として存在する以上
 は軀殼あり、随つて氣質あるものであるから、之れをなくすることはできぬ。其の
 代りには其の氣質を善化すべきである。善を知りて直ちに之れを行はなければ
 ならぬ。即ち知行合一で以て、小人といへども君子に化し、聖人と同じき者となる
 ことができる、と説いて、大いに教育上實際上有功なる言説を立て、をります。



其の性善と氣質の關係につきては、全く説明を缺いてをつて、諸他の學者と共に困
 窮の境に陥つてをるのである。又其の善といふことも、實は絶對的の善であるべ

きはすだが、どうも彼はそこまで考へつかずに、相對的の善として呼んでをつたや
 うでありまして、往々粗漏なる所があります。

とにかく、吾人若し私欲の掩蔽する所とならずして、即ち太虚に歸することがで
 きたならば、天理存し仁徳明にして、萬古不滅である、生死一如である、神變盛大であ
 る。何ぞ利害生死の境に臨み、趨避動亂の狀を現せんや。是れ天命を知つた所であ
 る。弱年の者でも此處に達した者ならば、長在の者である。老年の者でも達せ
 ざる者は、夢生の者であると曰ふてをる。蓋し中齋の自得深く、且つ強き、吾人をし
 てうたゝ、異日の變事を豫想せしむるものがある。

〔學風〕。彼の學風は嚴正にして、恰も秋霜烈日の如き觀がある。其の塾徒に對す
 るや、先づ「吾門學道、以忠信不欺爲主本」といふ陽明の語を揭示し、苟くも不忠不信
 の行あり、人を欺く如き者は、手打ちに致すが、それ承知ならば、來れといふ櫛幕で、劈
 頭畏懼戒愼せしめたとのとである。而も常に師弟の別嚴正にして、鞭扑を加ふる
 ことさへありて、敢て假借することがない。どうも壯夫勇士的であつた。特に學
 の要は忠信を主として、孝弟仁義を躬行するにあるのみと盟約して、心を正し、徳を

明にし、行を果すことを努めた者である。此においてか、王陽明の心學、知行合一教はいよいよ明瞭に發顯せられたのであります。かの變事は蓋し彼が靜慮の結果にあらずして、彼が學風の峻酷に失し、自信の牢固に過ぎたるの餘り、感情の刺戟を鋭にし、神經に異狀を呈し、其の極端に趨りしものと思はれるのであります。

〔三教調和〕。彼の説や固より深遠の妙なきも、能く王學を振興して、幕末に異彩を放ち、儒夫を起たしめたと少からず。尙又神道を尊びて、東海之聖人、舍天照大神而誰當之と稱し、更に大神之靈明既符於孔孟及王子之良知矣とも稱してをる。それのみならず、佛敎の萬法唯一心、心外無別法、一切衆生悉有佛性等にも似てをつて特に、一旦豁然として天理を心に見る即ち人欲氷釋涼解す是に於て當に洒脫の妙此れに超ゆるものなしといへるなどは、最も禪宗と其の風趣を一にしてをる。現在彼は太虛は聖たり神たり佛たりとも説いてをつて、明かに太虛てふ樞軸に依つて神儒佛三教を調和してをる點もあつてあります。其の人物性行の奇傑なるが如くに其の學說意見も俊偉なるものがあつて、確かに倫理史上の一賢人と稱すべき者と思はれます。

〔其の末流〕。中齋の門人數十人あれども、其の人終りを全うせざるが如くに、其の學又傳を失へり。然れども近年まで遺弟正田竹翁、田能村直入等京坂に潜在して空しく變事を物語るに過ぎず。それとても今存するや如何、憐れむべきかな。

〔附説〕執齋、東里、一齋等の諸人

三輪執齋。名は希賢、字は善藏、別號躬耕廬、京師の人にて藤樹の直弟なり。(紀元二二二九年生、二四〇四年死。度量寛宏で、信王固深、尊朱亦不淺といひて、着實に心法を究め、徳行を修めた者である。立志を始めとし、孝悌を本として、其の孝悌を以て天地生生の徳と爲し、人に受けて仁義となるを説き、理氣は一つなり、只一向にとひ入るべし、自反内省は存亡の機なりなども教へ、さては、心存於己、則神肥於内、徳全於我矣と曰ひて、死生禍福を見ると一の如く、常に餘裕ありと述べ、特に王門の四句訣と稱せらるゝ、無善無惡、是心之體。有善有惡、是意之動。知善知惡、是良知。爲善去惡、是格物也の語を以て入門の誓約と心得、以て次第に色欲利欲、名聞の三大私欲を斥けて、本心を明かにすべしと勸めて、其の理致言行共に宗教的の處が多い。

中根東里。名は若思、字は敬父、三河の人、始め禪僧となり、禪及淨土の宗學を修めしが、偶々孟子の浩然之氣の篇を讀みて、道の廣大簡易なると是の如しと曰ひ、遂に還俗し、徂徠、鳩巢等に歴學し、後王學に歸した人である。(紀元二三五四年生、二四二五年死)。彼は仁を解きて天地萬物一體の心と爲し、人は天地の心なり、故に天地は人の身なりとも、又宇宙は即ち是れ人、人は即ち是れ宇宙、人の大全なりとも申してをる。學とは、合内外、以平物我而已矣のものとして爲し、さては、智を以て明覺、信を以て信實なりとし、自ら靜坐を勤めて、特に靜立觀心を行つてをる。而も一生妻子なく、毫も禪僧と撰ばざる有様である。是れ彼が幼時の影響にも因るべきが、抑も又王學の風骨を承け、藤樹の衣鉢を傳へて、いよいよ進化發達を圖つたからでありませう。

佐藤一齋。名は坦、字は大道、號を別に愛日樓、老吾軒といふてをる。江戸の人で、大坂の中井竹山、京都の菅川淇園、江戸の林簡順等に學び、林述齋を始め、松崎謙堂、釋大典等と親交した其の王學に入りしは自得に依つた者で、而も表面には標榜してをらなかつたのである。紀元二四三二年生、二五一九年死。彼は晝夜も一理、幽明も

一理、死生も亦一理なりと爲し、死之後即生之前、生之前即死之後などの言を反覆し、更に生是死之始、死是生之終、不生即不死、不死即不生、生固生、死亦生、生生之謂易、即此とも謂ひて、易の生生を説きて、佛教の人生觀に類し、恰も其の輪廻轉生説の如き感がある。心の安穩なる處が即ち身の極樂なる處である。凡そ天地間の事は其の數皆前定してをるなど、説いて、よほど宗教化してをる所が見うけられる。而も彼は朱子學者として、述齋と共に林家の異學禁を助長した者であるが、世間では陽朱陰王といふ評判を取つて、内實大抵王學派に屬して、理氣合一論、知行合一説等を講説いたしてをる。但し惡の根源を觸感にありとしてをることは朱子と一致してをるのである。更に又安貧之心即富也、知我無福之爲穩、胸臆虛明などの諸語を吐いてをるのは、幾分か道家の風骨に染んでをるやうに思はれます。一齋の門よりは名家が少からず出てをる。佐久間象山、吉村秋陽、山田方谷、奥宮愷齋、竹村悔齋、林鶴梁、池田草庵、安積良齋、河田藻海等ありて、大抵王學を主張してゐて、幕末の志氣を鼓舞したることが幾許なるか知れぬのである。彼は又教育上にも大効果を與へたもので、畢竟近世德學の中心となつた者と謂はなければなりません。

其の外陽明學派に屬してをる人達の中て注目すべきものを舉げてみませう。
 梁川星巖の凡塵一體説。林良齋の無我寂靜説。吉村秋陽の一念動機即宿善開發
 説と唯一心説。奥宮愷齋の清冷悟脱神道等の諸説。春日潜庵の一念清淨説と萬
 物一體説。池田草庵の光明耀靈説などは儒佛調和とも見るべき者である。尙愷
 齋の如きは和漢今古神儒佛耶を打ちて一九と爲すべしと絶叫し象山も亦宇宙間
 の實理二なし大丈夫當に大塊ある所の學を集めて以て大塊なき所の言を立つべ
 しと喝破して、いづれも王學の心地に立ちて集大成の壯志を有し渾熟圓滿の偉業
 を期してをったのである。

之を要するに、日本の陽明學者は、其の適切簡明なる教學を以て最も意を得たる
 ものと爲して、其の發揚開展を努め、更に元來支那からして佛教特に禪宗に交渉し
 てをったために、一層其の關係を親密にし、且つ新たに神道に融會する所があつて
 非常に實際的ならしめて其の功果の偉大なりしことは、遂に朱子學派以上であつ
 たのであります。

第九章 復古學派

第一節 孔孟學の要領

山鹿素行を端首として伊藤仁齋、荻生徂徠の唱道した所は、其の名は或は古學或
 は古義學、或は古文辭學と稱すといへども、つまり一の復古學に歸するのである。
 即ち漢唐宋明諸儒の新説に依らずして、直接に元祖孔子及び孟子の古説に順はう
 としたものであるから、此に先づ孔聖孟賢の學説の内容を述ぶるの必要がある。
 されど其の詳細は多少世に知られてをるとゆゑ、今は唯講義の順序として、其の倫
 理説の極大要だけを記載せうと思ふ。而も元來斯の孔聖の説は儒教として本邦
 に傳播せられてからこのかた、常へに我が倫理思想を翼成したものであるからし
 て、今併せて、其の由來する所を明にするの便利をも得るのである。尙荀子も確に
 一の碩儒にして、孟子とはよほど其の趣を異にしてをるけれども、とにかく孔子の
 流を汲んだ者で、而も我が徂徠は非常に之を參考したのであるから、傍ら其の特徴
 のみを示しませう。

孔子が教學の主眼は人格を完成すると國家を平定するにあつたので、而も之れを爲し遂ぐる上には、必ずそれ〴〵に一定の法則がなければならぬ。是れが即ち禮儀と名づくべきもので、乃ち吾人が一切の行動云爲は皆唯此の禮に由るべしと致したものであります。然るに禮は、智識に屬するもので之れを行ふには別に意なるものがある。其の意は或は倫理的に動き、或は生欲的に動くものであるから音樂を以て此の意を鍛鍊して倫理的ならしむるのである。而して其の極竟に仁に歸達するのであります。仁は我が心の統一せる無差別の境界を稱するもので、即ち絶對の徳にして、一切の徳皆之れより分化し、一切の倫理的法則また悉く此に發生する所である。五常五倫の如きは、皆其の表現であり、活動である。此の如くして以て身を修め、又國を修むるに至るのである。國にありても仁者が其の統一の位に居つて、禮樂制度を以て天下に臨んだならば、四海は安寧に歸するのであるとしてをります。而して孔子のいはゆる道なるものは、かく倫理に率由するを以て主眼とし、敢て高興迂遠の事をいへるものでなくして、つまり修身經世に外ならぬものであるとせなければならぬ。

子思は孔子の道を深遂にしたもので、誠を掲げ出して以て宇宙の根原人類の本性に説き及び、之れに順へば即ち天道彝倫に合するを得べきものなれども、此の外に人類には知と行とあり、知は物象を識別する所以のもの、行は之れを行爲に發表する所以のものである。而も此等に各上中下の種類あるに依つて、人類の本性を知ると否とを生じ、或は背倫非道なる行爲を爲す者あるに至るとしたのであります。

孟子は之れを承けて、人類は皆惻隱羞惡辭讓是非といふ、仁、義、禮、智の四徳に成るべき四端の心を固有するものにして、つまり其の性は誠即ち善なりとし、先天良心説を抱いてをつたのであります。然れども慾が之れを蔽ふことがあつて、以て人類の行爲倫常を過まるに至る。故に吾人は意志を鍛鍊して、慾即ち情惡を捨て、全く性の善と融合せしめなければならぬ。此の境を指して浩然の氣と稱するのである。即ち良心の命に順ひて、本心の善を發揮し得て、萬行皆善となるのである。之が不忍人之心にして、日常に於いて、修身にては、不忍人之行となり、政治上にては、不忍人之教となりて、萬事倫理的となるものと説いたのであります。

此の孟子に對して荀子あり。同じく孔子及び其の徒から出たといふてをるけれども、生の慾を以て性と爲し、隨つて之れを惡なりと解いたので、孟子と正反對である。之れに依つて先王は夙に禮樂を作り、教學を施こし、主として倫理的法則に順從して以て其の性惡を抑制すべしといたしてをりました。

而して後來の儒者は之れを種々に變化し開展するに至つたのである。就中程朱陸王諸人の如きは、其の最も著しい者であるが、もはや古色を帯びず又舊態を存せざるやうになつて、實際異種別派の旗色を見せてをる。此等に對して支那に於いても既に明の末に吳廷翰(名蘇原)あり、吉齋漫錄(魏記)檀記等の書を著はして、孔孟の古説に復歸すべき旨を主張したのである。清朝にも漢學派なるものありて、幾多の鴻學皆復古の意見を抱いてをる。それはさておき、今日本に於いて唱道せられた所の復古學なるものは、大抵以上述べた所の範圍を出てをらぬので、純然之れを格守祖述したものであります。

第二節 山鹿素行の學說

(小傳)素行、姓は山鹿、名は高祐、初の名は義以、字は子敬、通稱は甚五左衛門、號は因山、堂の名は曳尾、又軒の名は素行といつた。父は伊勢龜山の藩士であつたが、陸奥會津に流寓してをつた時に、彼を生んだので、後水尾天皇元和八年(紀元二二八二年)西洋紀元一六二二年(秀忠時代)である。幼より江戸に出て、榎町濟松寺の祖心尼の許に養はれ、六歳以後塾師について讀書算數を學び、漸く四書五經等を通誦するに至り、九歳以後林羅山の教訓を受け、數々詩文をも作つた。十五六歳の時大學論語を講述して、聽衆が多かつたといふとである。又十五以後尾畑景憲、北條氏長について兵學武術を練習し、更に十七歳の頃高野按察院光宥法印に兩部神道齋部氏嫡流廣田坦齋に忌部神道の秘訣を受け、又和歌、草紙物語等より、老莊佛禪等の諸子諸教までも修めて、其上黄樂の隱元などにも參したといふとで、博識多藝なると實に驚くべきほどである。之を以て諸侯大夫以下來り學ぶ者甚だ多く、中にも北條安房守、松平越中守、淺野因幡守、丹羽左京大夫、阿部伊勢守、板

倉内膳正、松浦紀伊守、本多備前守等は最も名家にして、而も非常に素行を尊信した人達である。又紀伊大納言阿部豊後守及び加州家より切りに、招聘を受けたが、後遂に淺野内匠頭に祿千石を以て、賓師として召しかへられた。八年間治績を擧げたる後、江戸に歸り、専ら文學兵法の教授を以て任じてをつた。其の間に「聖教要録」三卷を著して、他家新説を排し、自家古學を立てたが、これ偶、幕府の嫌惡に觸れ、淺野内匠頭に御預けの身となつたのである。其の原因は程朱學を非難したるにありて、執政儒員等の彈劾する所となり、尙其の徒弟の多衆なりしとも、當局の忌諱した點である。而して彼は毫も狼狽の跡なく、沈毅嚴肅、永く配處に在つて、諸生に講述し、陰に陽に其の感化を與へたので、かの四十七士の義舉の如き實に素行の餘烈が與つて力にあつたのである。此の際に出來た「配所殘筆」は最も彼が心情を言ひ表はしてをる。十年の後赦に逢ひて、又江戸に還り、母子と共に淺草田原町積徳寺に隱居し、空しく老を養ふてをつたが、衰弱の極、靈元天皇の貞享二年(紀元二三四五年)西洋紀元一六八五年(桐吉時代)に歿した。享年六十四。其の著は「聖教要録」「配所殘筆」の外、「山鹿語類」「武教小學」「武教全書」「中朝事實」原

源發機等諸方面に亘つてゐて、多部多冊である。彼は經學者たるばかりでなく、武士道、又國史神道を發揮せる倫理學者であり、實踐道德家でありました。

〔主張〕。素行は始め時流に隨つて、周程張朱の學を宗とし、夙に「治教要録」「修教要録」の書を著したのであるが、研鑽を積み、造詣いよ／＼深くなるにつれて、一方面ばかりに踴躍するが過ぎず、四十歳に至りて、理氣心性の説に疑を懷き、精究審思の後、遂に「聖教要録」なるものを著して、斷然、道統の傳宋に至つて、竟に「泯没す」と叫んで、終直に周公孔子を師として、漢唐宋明の諸儒を斥け、自ら聖教の直傳者即ち儒學の發揮者たらんとを期した者である。是れ實に我國に於ける破宋學者の嚆矢にして、而も復古學者の先鞭を着けたのであります。仁齋も略同年代に此の如き意見を有するに至つたやうであるけれども、其の著書の年代は遙に半百の星霜を隔てゝをるのであるから、どうしても復古學の創唱者としての月桂冠は之れを我が素行に與へなければならぬ。當時播州赤穂の城主淺野長友侯が、聖學の筋目發明仕候事、異朝にさへ無之候間、古今其方一人なりと稱したのは、敢て過褒てはありませぬ。

〔本領〕。伏羲、神農、黃帝、堯、舜、禹、湯、文、武、周公の十聖人は其徳其知天下に施して、萬世其澤を被る。周衰ふるに及んで天仲尼を生ず。生民ありてより以來、未だ孔子より盛なるあらざるなり。孔子没して、聖人の統緒と盡く。曾子、子思、孟子亦企望すべからすと曰ひ、宋明の學の如きは儒を陽とし、異端を陰とするものにして、就中周濂溪、邵康節や陸象山、王陽明は聖人の罪人にして、儒の異端なりと爲し、張橫渠は老子、程明道は釋老に本づく者である、唯朱元晦のみは其の學を詳にして、孟軻の後の一人と稱めてをります。而して彼がかくいふ所以のものは何ぞといふに、聖學の筋には文字も學問も不入、工夫も持敬も靜座も入不申、唯身を修め人を正し世を治平せしむるとの道理を分明に得心して、今日卑近の用事を務め果すとが聖教の要旨である。聖學の定規いかたを能く知り、規矩準繩に入つた時には、誠に心廣く、鉢ゆるやかである。而して此の學が相續かば、智慧日に新にして、徳自ら高く、仁自ら厚く、勇自ら立て、終には功もなく、名もなく、無爲玄妙の地に至るべく、されば功名より入て功名もなく、只人たるの道を盡すのみである。即ち必ず聖人を師として學び、遂に以て自然に人道を行ふに至るとを以て聖學の本領としたので、之れに依り

て異學新説を排し同時に古學聖教を推し立てたのであります。

〔宇宙論〕。彼は宇宙を以て無始無終にして、古今唯一般、常にして無窮なりと解き、てかの邵康節が數を以て天地の消長を計量するの非を否定してをる。隨て天地に開闢なしと曰ひて、創造説を取らず。又消長増減なしと曰ひて、不變不滅説を抱いてをつた。而も進んで萬物の本體は長久にして生生息むとなきも外形は起滅あり消長あり、往來屈伸あり、死生榮枯ありと解き、即ち實在と現象との二方面を分別してゐたやうである。更に又其の本體に就きては、易經の所説に基づきて陰陽を掲出し、之れを以て天地の間に盈ち造化の功をなして、天地萬物の全體たるものなりと爲し、其の徳至大至公なりと云ふてをる、其の結極を總稱して太極とするので、先後本末を含蓄して、至れり盡くせりと申してをる。

〔倫理説〕。彼が學説の中心は前條の如き處にあらずして、倫理道德の點にあるのである。故に彼は粗にして此は精である。既に上に述べたる如くに、聖學は人たるの道を學び、聖教は人たるの道を教ふるものにして、唯日用卑近の間にある。即ち修身齊家より治國平天下に至るまでの日用の道德を以て教學の本領とし、知至

りて而も禮備はり、遂に中庸を得るやうにいたすべきである。而して其の知を致すには、畢竟古訓を學び、聖人に範りて、直ちに之れを日用に施すにありと説いてをる。是故に家に家教あり、國に國教あり、天下に天下の教ありて、各々此等に依りて行動云爲することが善であるといたしたのであります。

〔心性〕。元來人は天命なる性を有してをる者で、内に發動して意と爲り、外に迹を止めて情と爲つてをる。此等を擧げ稱して心とする。此心は一身の主宰であつて、志氣思慮の如きは其の用に過ぎぬ。此の意、情、志、氣、思、慮が中を得ると否とに依つて君子小人の別が起つてくる。乃ち此の別の起つてくるのはつまり先天的でなくして後天的である。換言すれば、習慣教育の正しきと否とに依りて起つてくるものといふ意見を持つてをたのである。故に性の善又は惡と確定する如き説を執らずして、善惡を以て之れを言ふべからざるものと論じてをる。

〔正徳〕。さて其の正しきといふは何かなれば、仁義禮智である。就中仁は根本にして、克己復禮はそれである。是れが人の人たる所以で、五常を兼ねる語であり、天地生々の心を云ひ、又天命の性の形容ともいふべき者である。而して此の仁は義

に因つて行はれ、義は仁に依つて立つもので、仁義は離るべからざるものである。

此の仁義は以て人が自然に固有してをる所の愛惡の情をして、中庸を得せしむるものである。次に禮は天地人物の間に自然に存する條理(又理)にして、特に人を相存立せしむる所以で、中を制する所以のものである。智は能く格物して、義を以て利と爲し、省察力行するに至らしむるものである。而も義と利とは分別すべきものでなく、つまり利は公利にして、義の和なる者をいふのであると申してをる。其上忠以て君長に事へ、信以て朋友に交はり、恕以て人に對し、恭敬以て事を爲さば、自然に德行天地に通じて、萬物育す。即ち天命の性の全く明かになりて、誠ならざるはなく、中庸を得て、人道即聖道即天道を成就するをうべしと考へたのである。〔自國の尊重〕。然り而して其聖道の古來最も善く實現せられた處は我日本國にして、中國、中朝、又中華文明の土と稱して、支那人の自贊語を皆取り上げてをる。蓋し我國には智仁勇の徳が完備してゐて、遠く支那の及ぶ所ではない、國體も神聖であり、國風も溫雅である、毫も彼を慕ふべきでない。吾人は唯此の國體を尊びつゝ、此の國風を守つて行くことが即ち正道であると説いてゐる。思ふに素行が道徳上

決して義理の一方に偏せずして、日用を主とし、而も實利主義を唱へたのと、又國體を尊奉し國風を崇尚して、國家主義を立てたとは、沿々として迂濶空虚に流れ剩さへ卑屈柔弱に陥つた所の群儒に傑出せる所以で、眞に卓拔なる人物と申さなければならぬ。

〔武士道論〕。尙素行に就て特に叙述すべきとは、武士道論である。武士道發達の事に關しては、屢述べましたが、此事を講究して、意見を立て、書を著した者は未だ一人もなかつた。然るに素行は第一流の學者と兵家とを一身に合せて、士道の緊要を説き、精神を述べて自ら武士道の實現者權化者となつたとは、日本倫理史上の大光明である。今此に其大要を叙し、併て後出の學者の書物を録するとしよう。

第一、本を立つるには、自己の職分を知りて、道に志すにあり。

第二、心術を明にすべし。即ち心を存し、氣を養ひ、又度量を寛宏にすべし、志氣を高尙にすべし、容姿を溫籍にすべし、風度を超脱にすべし、義理を明辨すべし、命に安んずべし、清廉にすべし、正直なるべし、剛操なるべし。

第三、忠孝を勵み、仁義に依り、事物を詳にし、文學を博うして、徳を鍊るべし。

第四、自ら省みて自ら誠むべし。

第五、威儀を詳にするに付き、萬事敬を以てして、視聽言語動作を慎み、又飲食を節し、衣服を正し、居宅を嚴にし、器物を正し、禮義を重んべし。

第六、日用の行事を正し、財用の受與を節し、遊戯を節して、日用を慎むべし。

素行は右等の條項に就て、細密なる辨明をしてをるが、つまり、武士は其の身を顧み主人を得て奉公の忠を盡し、朋輩に交りては信を厚うし、身の獨りを慎みて、義を務めとすべきである。而も先進の指導に隨つて、習ひ知り、遂に天徳の自然、人道の本意を自得するに至るべく、常に意志を正し、儀容を整ひ、常事を全うすべしとしたものである。尙略言すれば、忠義を以て本領と爲し、常に意思の鍛鍊、儀容の修爲を致すべきものと説いたのである。女子の教戒も嚴正になし、決して懦弱を以てすべからず。盛衰を以て節を改めず存亡を以て心を易へず、賊に當り敵に死するをも怖れざるの禮節貞操を訓練すべしと申してをる。畢竟素行は、士たるの道、其俗殆ど異俗を用ふるに足らんやと白ひて、其の教學は儒道に依り、其の法儀は國風に依つて、いはゆる武士獨特の道徳を説明したのである。〔武教小學及山鹿語類〕

中の士道篇等最も見るべきの著書である。其の餘にありては、貝原益軒の「武訓大
道寺友山の「武道初心集」、長沼濬齋の「兵要録」、井澤蟠龍の「武士訓」、高林政明の「武家小學」、
齋藤拙堂の「士道要論」、吉田松陰の「武教講録」等がありて何れも、忠孝、勇武、廉耻、信實、清
爽、仁義、禮節等の諸徳を人心固有の性に基き、我國古來の氣風に沿ひ、神儒又は佛の
教理を以て解説してをる。中にも友山は忠義、勇の三徳を武士道の肝要とし、拙堂
は禮義廉耻を以て士風を正すを主なるものといたした。惟ふに武士道は本と上
古時代にありては、殆ど日本民族の普遍的倫理思想であつたけれども、中古以後は
専ら武士といふ一階級に限る所の特殊的倫理となり、而も儒教と禪宗との助成に
依りて、死生の覺悟を了し、禮義の履踐を果さしめたのであるが、但し其の忠を盡く
すべきの主は領主又は仕君に止まる有様で、其以上の大主國君又天皇に至らな
つたが多く、或は自己を没し、社會を没するなど、随分可もあり不可もあつたので
ある。其不可を去つて、其可を執り大に改善展開する所があつたならば、實踐道德
上著るしき効果あることは確かである。現に今日軍人教育國民教育には非常に
應用せられてをるのであるから吾人は大いに之れを尊重せなければなりません。

第三節 伊藤仁齋の學說

〔小傳〕仁齋姓は伊藤、名は維禎^{（五ノミナ）}字は源佐^{（ヒコサ）}、仁齋、棠隱又古義堂と號し、其の嘗齋を誠脩
室と稱してゐた。後水尾天皇の寛永四年紀元二二八七年—西洋紀元一六二七
年^{（家光時代）}京都堀河の東街^{（今の東堀川）}に生まれた。祖先是攝州尼崎に住してゐた
が、祖父了慶京都に移り、父長勝は長澤屋七右衛門と稱して材木屋を營んでゐた。
仁齋十一歳初めて師に就きて、大學を讀み、治國平天下の章に至りて、今の世亦此
の如き事を知るものあらんやと曰ひて、非常に感奮する所あり、爾來研鑽を積み、
志業を立て、時に詩を賦して、聖人を慕ひ、正教を崇ぶの情を表はしてをる。嘗て
〔小學〕延平答問を精究し、融然として利祿の念功名の志を忘るゝに至り、更に性理
大全、朱子語類等をも熟讀し、竟に無極の妙説を解了したやうである。乃ち心學
原論、大極論、性善論の三大篇を作り、以て朱子學を發揮したのである。時に年二
十八九であつた。其後麻疾に罹り、門庭を出でざると十年、而も親族の者が學問
は彼邦の事なり、宜しく醫を修めて生産すべしと勧められたけれども、毫も屈す

ることなく、本宅を仲弟に附し、自身は、松下町に別居して、専心書を讀み道を講じたのである。間々佛老をも學んだが、幾許もなくして之れを廢した。かくして彼は博覽深討するにつれて、漸次宋儒性理の説が孔孟の學に異つてをるとを發見して、明鏡止水、冲漠無朕、體用不離、氣別殊等の言は皆佛老の餘唾を吸ふてをるのであると斷定を下すに至り、さては、大學も其實孔子の遺書にあらざる旨を觀破した。遂に以て古義を唱道し、生徒を教授した。古義堂の稱は實に此の時に始まつたのである。時に年三十七八であつた。後更めて、論孟古義、中庸發揮を草定し、古學の鼓吹に努めたのである。熟に於いては、主として、論語、孟子、中庸を講述し、傍ら、易經、近思錄等を教授し、末節に拘泥せずして、真意に徹底して而も活用するとを本旨としたのである。四方其の高風碩學を景仰して來り學ぶ者三千餘人、殆んど日本全國に及び、いはゆる堀川學風は程朱學、陽明學に比して、優るとも劣らざる、儒學界思想界の大勢力となつたのである。而も其の人の學徳共に又異學他派の頭領といへども、皆推尊して措かず、或は、學問文章日本魁楚と稱し、或は、太山の如し、或は、豪傑の士、君子人、或は、超然獨立する者、日本文運啓行の

嚆矢者とも曰ふてをる。仁齋毎旦運筆亂書を爲し、又餘暇に詩歌を吟詠した。惟ふに彼れ獨創の見を立て、より、宣揚薰陶に就事したると四十餘年、東山天皇の寶永二年(紀元二三六六年)西洋紀元一七〇五年(編訂)七十九歳で病歿した。門人謚して古學先生と稱す。仁齋の建てたる祠堂は、今猶其子孫と共に堀川の舊邸に存し、彼父子も合祠せられてをる。彼の著書は前掲「古義發揮の外語孟字義」大學定本「童子問等がある。皆精讀の價值を有してをる。其他「仁齋日札」「古學先生文集」等亦見るべきである。而して其の出版は仁齋の死後其の嗣東涯の經營に依つた。之れも注意すべき點であります。

〔本領並典據〕。仁齋の學風は實學を爲して、實徳を保ち、隨つて實材を行ふことを以て骨髓としてをる。蓋し實學ありて而して後實徳あり、實徳あれば實材隨ふと曰ふてをつて、即ち學行一致又知徳一致の説とも稱すべきものと考へられる。先づ知りて後に行ふと、即ち固より學問の常法通例であるが、結極實徳ありてこそ實智あるもので、惟實徳が肝要であると説いてをります。曰はく、聖哲の書にあらざれば讀まず、聖哲の事にあらざれば爲さず、聖哲の訓にあらざれば道はず、聖哲の法、

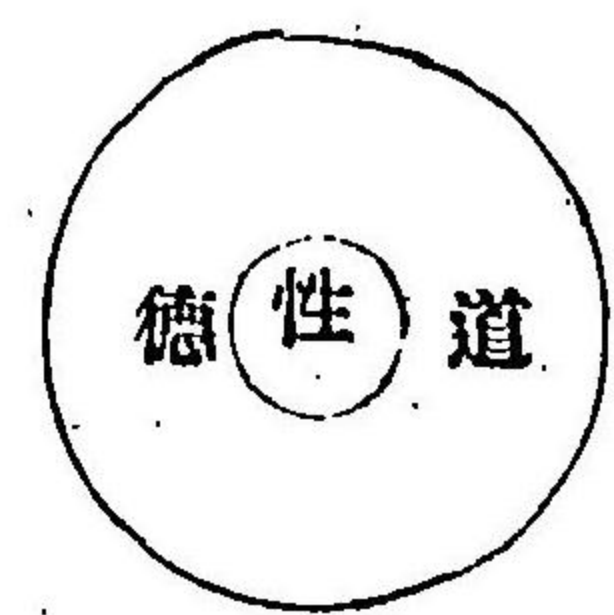
にあらざれば行はずと。畢竟彼が學問とする所は此の外には出てをらぬ。而して殊に「論語」を尊奉して「最上至極宇宙第一書」又「萬世道學之規矩準則」其言至正至當徹上徹下とも曰ひて、眞に推稱を極めてをる。之れに次いで「孟子」を以て「萬世のため」に孔門の關鑰を啓くものにして、之れが註脚たり、義疏たり、津筏たり、隨つて後世の指南夜燭なりと敬稱してをる。更に「語」「孟」を對稱しては、論語は専ら教を言ふて道其中にあり、孟子は専ら道を言ふて教其中にありとも申してをる。蓋し彼れ之道とする所は仁義にして唐虞堯舜の行ひしもの、教とする所は學問にして孔孟の説けるもので、此の二は天下の至尊なるものとしてをるのであります。而して此の二書を本經と名づけて、天下の理を包含して缺くなく、百家の典を會萃して遺さずと稱し、之れに對して、「詩」「書」「易」「春秋」の四經を正經、「禮記」「周禮」「儀禮」の三禮及び「左傳」「公羊傳」「穀梁傳」の三傳等を雜經と呼んでをり、中庸は「論語」の衍義で、鬼神妖孽を論ずるを除くの外、其言皆整々として、論語「孟子」と相表裏し大に世教に補あるものと稱してをる。「大學」に至りては、齊魯の諸儒「詩」「書」の二經に熟して未だ孔孟の血脉を知らざる者の撰する所なりと評し去つてをるのであります。

〔宇宙論〕。仁齋は此の如くして、慕直に孔子を師とし、天地とし、最上至極宇宙第一聖人とし、論語に基づき、孟子を參合して、以て宇宙論を立て、活道徳を説いたのである。即ち宇宙を以て一元氣と爲し、而も之れを一大活物と爲して、いとも明晰なる一元論を唱道した。蓋し天地の間は一元氣のみ、或は陰たり、或は陽たり、兩者ひたすらに兩間に盈虛消長往來感應して、未だ嘗て止息せず、此れ即ち天道の全然、自然の氣機萬化、此れよりして出て、品彙此れに由りて生ず、此より以上更に道理なく、更に去處なし。此の元氣ありてこそ、天地は充實通徹し又活動するものとしてをる。是故に或は之を唯氣論、若くは唯物論、若くは靈活論、若くは活力論とも名づくべきである。道は實なり、理は活なりとも曰ひ、全然實際主義、活動主義を確立してをる。尙、又無始無終にして而も生生進化發展して止まずと説いて、積極主義、樂天主義を懷抱してをるのである。彼は天地間の相對的の死を認むるも、絶對的の死を認めず、一に生に歸するものとし、又靜につきても之れを相對的として、絶對的の動に歸せしめ、惡につきても亦之れを相對的にし、絶對的の善に歸せしめてをる。其の思想は健全にして且つ、謙見も卓絶せるものといふべきであります。

〔倫理説〕仁義。上説よりして倫理説は出てをるのであるが、最も彼の特色異風を窺ふべきものである。道とは路で、物の往來する所である。天道は陰陽地道は剛柔、人道は仁義である。聖人の道は仁より大なるはなく、義より要なるはないのである。畢竟仁義は道の本體で、千言萬語の總括である。其の仁とは何ぞといふに慈愛の心である。其の義とは何ぞといふに辨別分明なる行である。但し仁は主であつて、義は其の中に包含せられてをる。仁や是れ實に人道の大本、衆徳の綜要、聖學の宗旨である。即ち又積極的意義を有せしめ、實際的動機としてをるのである。而して其の道といふも人の外にはなく、俗の外にはない。つまり人の日常往來流行する所、動作云爲する事、即ち人倫で、常道ではあるが、同時に至道であるとしてをる。更に徳といふても、存する所、濟す所、資質に屬し、聖人の常に言ふ所、天人の至美萬善の總括で、先天固有のものであるとして、道と別にしてをるが、結極外顯のものと内存のものについて見たから、一つものとしてをるのである。故に道も仁義、徳も亦仁義であると曰ふてをる。

〔四徳論〕さて仁義の二者は實に道德の大端、萬善の總腦であるが、尙之れを分明

に曰へば仁義禮智である。禮は仁義を節文すると、智は仁義を知りて去らざるとである。いづれも皆道德の名であつて、かの宋儒のいへるが如く性や理の名ではない。性といふは、即ち人とし生ける物には皆悉く固有する所の惻隱、羞惡、辭讓、是非の四端是れにして、専ら己れに有するものをいふのである。然るに道德は徧なく天下に達するを以てして言ふもので、性の擴充發展した結果の所について稱するのである。即ち性は個人的で又主觀的、道德は普遍的又客觀的であるとしてをつたのである。



性 = 道德

人の性は此の四端を固有するが故に善なり、故に能く仁義禮智てふ天下の徳を成すとがでさる。之を以て仁義は即ち吾性といふてもよい、又吾性は即ち仁義といふてもよろしい。然し仁義を以て性中の名とするは不可といふてをる。四端の

性は種子で、仁義禮智の道德は果實であるから、仁義禮智の種子は性に宿れりといふことはできて、その完全なる果實までが性中の本具確存せりとはいふべからずとして、をつたやうに考へる。蓋し是れ孟子の所説に依りて性を説き、道德を論じたのであるが、むしろ孟子以上、孟子以外に、詳明を致したといはねばならぬ。惟ふに仁齋は道德上四端擴充主義、即ち今日のいはゆる自我實現主義を唱へ、特に元氣説よりして仁慈愛又は愛又は實心、即ち人道的博愛を以て其の要素とし、又其の終極とした者であります。

〔學問論〕。惟ふに仁齋は此の道德、即ち此の仁義禮智の道德を以て學問の唯一對象としてをる。仁義禮智の四字、是れ學問の全體と曰ふてをる。學問を以て單に道德學倫理學としてをるとは、東西古今の儒者が等しく免るべからざる所の偏見であつて、仁齋も亦之れを脱するところができなかった。又曰はく、聖人學問の第一字は是れ仁、義を以て配と爲し、智を以て輔と爲し、禮を以て地と爲すと。而して之れを實行修爲する方法としては、忠信敬恕を重んじ、以て智仁勇の三徳を得、遂に之れを大關鍵として道に進むべしとなし、特に誠を以て實行の精神とした。其の實行

は學問に依りて來るもので、道德圓滿になり、随つて政治も其の一現象として自然に完備すべしと爲したので、やはり孔孟の古説眞意を得たものである。但し彼は故意に政治を云々し、經濟を喋々し、事功に汲々するが如き者を賤視したのである。自ら求めずとも、専心道德の完全擴充を務めとしたならば、期せずして此の如き結果は到來するものと解してをつたのである。夫れ心は活物なり、學は活法なり、活物を以て活法を治む、宜しく草木を養ふが如く、灌溉培植を務めて、摧折屈撓して以て其生氣を遏絶すべからずと曰ひて、全然活動説を唱へ、又學問は須らく活道理を看んとを要すべし、人は進まざれば退く、退かざれば必ず進む、一息も停るとなし、君子は過なさを費ばずして能く改むるを以て貴しと爲すとも曰ひて、全然積極論を叫んでをるが之れは皆一に道德の發展擴充にあるのであつて、之れ以外に目的はないのである、本領はないのである。換言すれば政治事功は自然に道德の擴充の中に含まるゝのである、只一部分であるから、別に云ふほどのものではない。徳は根本なり、道は總要なりとの意見は、以て容易に之れを肯定するに足る。

〔性行〕。是故に仁齋は師道を重んじて、人材を長育するに何等の造作する所もな

く、又何等の添傍する所もなく、人によりて自然に教を立て平易に導を爲すの方針であつて、而も師弟の間は親子及び君臣の關係を兼ね備ふべきものと爲し、自身も之れを實行してゐたのである。其の他孝道を全うし、清貧に安んじ、禮儀を守り、寛厚和緩誠を以て人に接し、義を以て事を處したるなど、其の言ふ所と殆んど一致してをる。但彼は一生仕へずいはゆる仁義禮智の道德を發揮して政治事功に實現するが毫もなかつたのであるけれども、此事は機會がなかつたからで決して志もなく又才もなかつたのではない。此の事は嘗て紀州侯より千石にて召されんとした時、祿はさておき少しのとなりとも國政を御相談成され候はゞ參るべしといふて辭した一事で明かであらう。是亦恰も孔子孟子の境涯と同様であります。《宋學との比較》。尙彼に就きて記述すべきことは、宋學との相異である。第一に、宋儒は理氣二元論なるも、彼は氣の一元論である。第二に、宋儒は復性復初を説けども、彼は見存せる性を發展して道德を充實すべしと言ふた。第三に、宋は性を二種とすれど、彼は氣質の性を以て本然の性とし、跡の見るべきものゆへ善なりとした。第四に、宋は大極、天性、仁を理で以て解して靜的であるのに、彼は皆一元氣にし

て活動すと説いた。第五は宋は多く釋老に取りたるも、彼は純然孔孟を守つた(祖朱を敬し、稱はした)。第六に、宋は學究的なるも、彼は德行を以て本とし、學究を以て其の功としたのである。畢竟宋儒と仁齋との根本差異は寂靜主義と活動主義とである。此點は素行も同様であるが、仁齋は最も生主義進化主義で、獨のバツルゼンや、又英のグリーン、ムアヘッド等に類してをる。蓋し彼は素行と共に日本民族の代表者となりて、其の積極的活動的特質を理論上に顯現したものと思はれる。

《佛老との比較》。更に佛老に對しても顯著なる差異があるが、彼が排斥せる點について比較してみやう。第一、聖人の儒は中庸を得てをるが、老佛は過である(中庸の刑名功利取は)。第二、儒は人倫、實理を主とし、老佛は潔淨虛無を尙ぶ。第三、儒は天道を云ひて活動的であるが、老佛は天理を云ひて靜止的である。第四、儒は社交主義(義經世の學、達道仁義禮智の致、社會的なるも、老佛は獨善主義個人的である)。第五、儒は義を重ずるも、老佛は義を知らず(宋儒は仁を知らずとす)。然しながら、全然之れを否定したるにはあらず、彼是の契合點即圓融無礙の境界を觀破して、學者より之れを見れば固より儒あり佛あり、天地より之を見れば本と儒なし佛なし、唯其れ一道のみと

曰ふてをる。其の識見の公平にして寛裕なるものあるを想見すべきである。殊に我が神道に對しては、國體及皇室の關係よりして尊敬の意を表し、我が國民が天皇に對し天の如く神の如くに事ふまつると中國も及ばざる所にして、我國の人の心を種とせるこの道のみぞよゝにたえせじと高誦するに至つたほどであります。《總結》。要するに仁齋の倫理説は活動的の道德主義で、良心説に近く、其の宇宙觀の唯物的なるにも拘はらず、理想派に屬すべきで、今日においても最も進歩してをる思想である。蓋し支那の儒學が日本に來りて孔孟に復古したものであるが、其の實大いに進化したものである。固より先聖の崇拜、古典の信仰等が過重なりしことは彼此相似てをるが、慈愛てふ積極的人情を根本とし、平等、無究、道俗不離等の説を立てたるなど、宗教的趣味を帯びてをつて、即ち品位を高尙にし、人格を完成し、崇高壯大なる理想を實現せんとするの偉風を有して居る。眞に本邦稀有の思想家と謂はなければなりません。

〔附説〕 仁齋の一族及門流

仁齋の子に、東涯を頭として梅宇、介亭、竹里、關嶠の五人あつたが、東涯最も著はれてをり、編輯に出版に又著述に依つて、専ら家學を大成して、彌増實踐道徳を鼓吹した。其の學問の博著述の富、我邦儒家の第一で、特に其の父師の説におけるや、罅漏を補ひ、幽渺を張り、筆削改竄する所が多くて、古義學の宣傳、堀川派の繁榮には、眞に大勳勞があつたのである。仁齋ありといへども、若し東涯なかりせば、古學の勢力は微々たるものであつたであらう。其の著書中緊要なるものを挙ぐれば、辨疑錄、古學指要、學問關鍵、古今學變、鄒魯大旨、經史博論、經史論苑、天命或問、復性辨、訓幼字義、閉居筆錄、東涯漫筆、紹述遺稿、紹述先生詩文集等である。其の餘、語錄標注類も夥多ある。其の説の概要を記せんか。聖學は人道で、人道は日常の行事である。即ち道德なるものは畢竟人の付合ふ仕方の名にして、孝悌忠信、仁義禮智、恭敬忠恕皆然りである。元來四端の心は萌孽の生ずる所、仁義禮智は千尋の喬木たる所で、自然實事の果遂完成を主とするのである。之れを教ゆるが實語、之れを學ぶが實學で、之れを行ふが實踐である。こういう様な單純にして而も近易なる道德主義を主張したのであります。

門下には、中江岷山、並河天民を始め、三重松菴、北村篤所、小川立所、香川太冲、釋道香等あり、東涯にも、奥田三角、青木昆陽、澤村稔所、菅崎嶼、原雙桂、原念齋等があつた。中にも岷山は穩健の説を抱き、心性は個人的、道徳は社會的、而かも人情は倫理の根柢なるを看破し、是れ即ち元氣の生活にして、帝道、命とも稱すべきものである。理は唯其の條理に過ぎずと説いた。仁義禮智は天下の達徳にして、性理にあらざ、四端の心は其の端緒にして、宋儒の所説の如く、性理の本原ではないと論じてをる。天民は極端の見を持ち、仁齋が仁義禮智は道徳の名にして、天地固有の物なり、人生の固有確存する所にあらずとの説に反抗して、四端の心は即ち是れ仁義禮智なりと唱へ、生と俱に生ずるよりして云へば、性、其の情實偽りなきより云へば、情、其の思を以て職と爲すより云へば、心なりと釋してをる。然し畢竟仁齋以下ではあるが、共に幾分か師説を補ふ所があり、一は方正なる學者、一は英邁なる材物となつて、其學徒は京都を中心として、永く存續し、陰然我が倫理界における重鎮となつてゐた。家田大峯、赤松滄洲、野村東阜、松川東山、片山北海、釋六如、村瀬栲亭等も此派の錚々たる者である。而して其の盛大なりし時は、凡そ寶永正徳の頃でありました。

第四節 物徂徠の學說

(小傳)徂徠、姓は物部自ら略して物と稱してゐた、氏は荻生、名は雙松、字は茂卿、幼名を傳二郎、通稱を總右衛門といひ、徂徠(まゝ徂來)と號し、其の社を濠園(わうえん)といふた。靈元天皇の寛文六年紀元二二二六年、西洋紀元一六六六年、將軍家綱の時代、恰も徳川光圀が管内の新寺を毀つた年において、江戸の二番町に生まれた。其の先は三河國荻生の人、物部守屋の後である。祖父玄甫以來醫を以て江戸に移住し、父方庵宗甫は綱吉の侍醫となつてをつた。徂徠は其の仲子である。家庭教育の下に、五歳字を知り、九歳詩を詠み、十餘歳文を作り、長老と談論するを好み、夙に成人の如き態度であつた。七八歳以後父の口述に依りて日記を録したので、之れが其の讀書力作文力の素を爲したとは疑はれぬ。十二三四の頃、林春齋及び鳳岡に就いて學んだともあつた。然るに十四歳の時父が上總國長良郡二宮庄本能村に隱退するに隨ひ行き、靜居專念、讀書研學を事とし、特に獨力大學諺解(林春齋著)を精讀して、大いに得る所あり、遂に群書を讀破し、漸く一家の見

を立つるに至つたのである。二十五歳江戸に還り、芝増上寺の門前に住し、困苦の中に、辛く門生を集めて程朱學を講述した。幾許もなく該寺山主の知る所となり、竟に綱吉將軍の耳に達し、其の庇護に依りて兵學を以て柳澤侯に仕ふるとかてきて、三十五歳の時五百石にまで加増せられ、又將軍よりも時に賞與を辱うしたのである。當時彼は仁齋の京都にありて古學を主張したのに對して、該園隨筆を著はして駁論を試み、語法の誤謬までをも非難したが、意外にも四十九歳程朱性理の説を斥けて却りて古學に歸し、而も明の李于麟、王元美に倣ひて古文辭を修め、竟に仁齋にも拮抗して、自ら復古學といふ標榜を掲げた。然れども徂徠は道學又哲學専門の者ではない、幾分政治家的でもあるが、寧ろ文學者、藝術家である。それで其の學の名稱も古文辭學といふ方が妥當であらうと考へる。彼は嘗て萱葉町に住居したからして萱^{クサ}||^{クサ}譚なるを以て該園の社號ができ、又牛込赤城下に借地してゐたから、赤城先生といふ稱號を得たのである。享保六年以後吉宗將軍の召に應じて、六論衍義等を講述し、毎に公の特待を受けてをつた。同十三年(紀元二三八八年)西洋紀元一七二八年)中御門天皇の御宇、浮腫病を以

て没した。享年六十三。一女ありしも夭折し、兄の子道濟字は太寧、號は金谷を養嗣としたが、其の子孫荻生氏を稱し、今現に東京四谷大番町に存してをる。徂徠才氣豪邁、凡そ學ばざるものはなく、支那語を當時の語學者岡島冠山に習ひ、漢文の直讀を期し、崎陽の學^{語學}既に成りて、乃ち始めて中華人たるを得、而して後に稍經子史集四部の書を讀まは、勢破竹の如けんといふてをつた。又兵學、政治、法律に通し、音樂習字に苦勞し、算數にも堪能で、廣象棋といふものをさへ發明して、其の各方面に亘つて、必ず有益なる著書を作つてをる。其の博學多藝にして、而も強肥勤勉なりしとは感ずるに餘りある所である。特に文藝においては本邦得易からざるの人物である。其の著作の主なるものは、辨道、辨名、を始め、譯文筌蹄、經史子要覽、大學解、中庸解、論語徵、孟子識、孝經識、尙書學、讀荀子、讀韓非子、及び、徂徠集、徂徠答問集等である。その他、政談、太平策等亦參考すべきものである。其の法律、音樂、兵法、度量等に關するものは、必要がないから此には省くことにしました。

徂徠の學は一に李王の古文辭に參同し、二に仁齋の古義學(主に仁齋の著、大學定本)

に啓發せられて成立した者であるが、大分荀子に依據してをつて、以て仁齋に抵抗を試み、随つて自説を莊飾してをる。彼は一方においては、聖人の心は唯聖人にして後之れを知る、亦今人の能く知る所にあらざるなり、故に其の得て推すべきものは、事と辭とのみ、事と辭とは卑々焉たりと雖も、儒者の業唯章句を守りて之れを後世に傳へ、力を陳べて列に就くは唯其の分なり、其の道の若きは則ち以て後の聖人を埃つ是れ不佞が志なりと曰ふて、聖人企及すべからず、道も關する所にあらずと、自暴自棄の態度を執つて、唯古聖人の事辭を承傳するのが自己の本分であると爲し、機械的、營業的に考へた。故に彼は思索的、哲學的、攷究を排斥し、其の或は空理、空論に終らんことを厭忌した者で、徒に己れが心と理とを以て之れを言はゞ、泛然として底止することなしと曰ひ、詩書は辭なり、禮樂は事なり、義は辭に存し、禮は事に在り、故に學問の要は卑く之れを辭と事とに求めて、高く之れを性命の微、議論の精に求むべからずと叫んでをる。されば他方においては、其の辭と事とを辨明し、叙述するの必要よりして、古語學的、研究を事とするに到り、其の結果、考證的、經驗的に道を始め、徳性さては政治教育をまで究明して、自然に物質論、又功利主義を立つる

に至つたので、此においてか荀子を利用し、遂に仁齋を凌駕したのである。古聖人の所説を唯一の對象としたことは、仁齋徂徠共に同一であるが、其の旨意と其の方法とは、全く別様である。仁齋は己れも亦聖人の如く道學を發揮せうといふ精神であるが、徂徠は唯之れを古語古意のまゝに後人に傳授せんまでの志願である。而して一は意を以て解し、一は文を以て釋するので、達意的と考證的、直覺的と經驗的との相異がある。つまり復古といふ状態だけにおいては一致してをるのであります。

〔道論〕。徂徠は禮義又は禮樂委しくいへば禮樂刑政を以て道と爲し、道は統名で、専ら政治法度の總稱であつて、此外には別にはゆる道といふものがないといふて、全然客觀的、外部的に解してをる。是れ近くは孔安國か、道は禮樂を謂ふといへるに據り、遠くは荀子が禮樂を以て道學の極、治政の要としたのに基づいてをるのである。又道を人爲的のものとし、先王の造つたものであつて、天地自然のものではない、禮樂刑政皆先王が一に天下を安んじ、利用厚生を爲さんがために、作爲し建設したもので、而も數十歲、數十聖人の心力、智巧に依りて始めて成就し得たと曰ふ

てをる。之れも亦荀子より得來つたのである。更に又道を治民の方法と釋し、或は仁を至大なりとすとも曰ひ、或は單に文なり、術なりとも申してをる。大抵荀子に似てをるのであるが、唯徂徠は明に道の根本する所を説いてをるのである。曰はく、道の大原天に出づ、古先聖王天に法りて以て道を立つ、其の道多端なりと雖も要するに天下を安んずるの道なり、其の本は天命を敬するにありと。又曰はく、先王聰明睿知の徳を以て天の命を受け、天下に王たり、其の心一に天下を安んずるを以て務めと爲す、是を以て其の心力を盡くし、其の知巧を極めて是の道を作爲せりと。蓋し彼の道とする所は天地自然に具存してをるものとはせぬけれども、天の法を因として、天の命ずる性徳の縁に依りて完成せられたものとしてをるのである。荀子にも幾分か認むることができれど、これほど明瞭ではありませぬ。然るに之れと反對に徂徠は荀子の如く明瞭に性惡を主張してをらぬ。「先王人の性に率つて以て道徳を立つの一語で確知せらるゝとてあります。

道——先王之道 先王 法天 利用厚生、仁治民之法、文、又術 禮樂 禮樂(事) 刑政(禮) (法則)——詩書(辭) (學文)

〔徳論〕。次に徳に就きては、彼は道と別の物とし、道は先王に屬し、徳は我れに屬す」と曰ひて、道の社會的なるに對し、個人的に解し、又仁智は徳なり、禮義は道なり」と曰ひて、道の形式的なるに對し、活動的に釋してをる。畢竟徳は道又は性、又は學に依りて、身に自得した所あるを謂ふので、主に仁と智とである。而して仁は長人安民の徳である、天地の大徳たる生を好むの徳である、君主たるべきの徳である、又聖人の徳である。智は人の長處を知るを以て大とし、又事物の理を知る能力をいふのであつて、亦聖人の一大徳である。其の至極が中和の徳である。禮といふも此の中を教へ樂といふも此の和を教ふるもので、共に徳の則たるものである。然し普通の人の徳は唯一技一藝の材のみであつて、各々安民の用に供するに過ぎざるものとしてをるのであります。



〔聖人論〕。彼は從來歴史上完全なる人格を有し、完全なる事業を爲し、吾人が道徳上常に理想とする所のいはゆる聖人を以て禮樂を制作し、正徳の道を成就した者

を稱するの名であると確定し、堯舜禹湯文武周公は此の聖人にして其の徳廣大高深、其の事業其の神化は至大なりと謂ひ、孔子は之れを集成し、道を後世に傳へられたので、其の後人に對せられたる功業徳澤は堯舜に賢つてを、つまり道は先王に屬するよりも寧ろ孔子に屬すべきである。實に孔子の前に孔子なく、孔子の後には孔子なしとしてを。彼はしかく聖人を以て神聖犯すべからず、後人及ぶべからずと爲してを、つたのであるから、其の心も凡人の得て知るとのてきぬものとし、其の所爲も衆人の固より識らざる所であるといふてを。而も斷して、聖人は學んで至るべからず得て窺ふべからずとさへ言ふに至つた。蓋し是れ天命は人に依りて性に受くる所殊つてを、故て、聖人には聖人の命あり、凡人には凡人の命しかない、大なるものは大生し、小なるものは小生す、皆命實に同じくないからである。唯各自學んで其の性の近き所を得るやうにするより外はない。即ち先王の道に順つて、各其の材を達し器を成して以て天職に共するのが古の道であると、かやうに彼は申してを。然れども孔子、子思、孟子等皆既に聖人の學んで至るべきとを云ふてを。然し孔子の後復孔子の如き人物がないとは事實上、徂徠のいふ通り

である。然しないからといふて學んで至るべからずとするのは暴論である妄斷である。恰も佛教の淨土教に似てを、やうである。否どうしても宗教の神又は佛が至尊至大至神なるが如き意味に解せらるゝのである。

〔性質論〕。之れよりして彼は人の氣質は天の賦する所豈變すべけんやとも、性易ふべしといふものは非なりとも申して、氣質と性とを同一視し、其の變化すべからざるを主張したのは、管に宋儒に異なるのみならず、又孔孟にも似てをらぬ。唯獨り荀子あり、凡性者、天之就(賦)也、不可學、不可事(爲)と曰ふてを。蓋し徂徠は之れに依つて明瞭に既を立てたやうで、まづ空前の斷案であらうと考へます。

〔標準説〕。又彼は卓然として道德上最も必要にして且つ重大なるいはゆる正邪の標準を確立してを、つて、先王の道に循ふ、是れを正といふ、先王の道に循はざる、是れを邪といふとも、先王の道は規矩準繩なりとも申してを。是れ亦宋儒の主觀的なるに反して、客觀的に指定してをるのである。然し善惡に就きては汎く之れを解して、先王の道にあらずと雖も、凡そ以て人を利し民を救ふべきもの、皆之れを善といふと曰ふてを、つて、正邪と矛盾するやうである。されど先王の道即ち禮樂

なるものも利用厚生を目的とするものであるから、やはり人を利し民を救ふとなる。故に是は廣義に云ひ、彼は狹義に云ふたので、其の目的においては合一してをるのであります。

〔功利主義〕。兎に角前諸項に依りて徂徠が倫理上目的論者であり又功利主義者であるとは分明であらう。まして是れ衆人の欲する所なるが故なりと曰ふてを、つて表面孟子の「可欲謂之善」と曰へるに依つてはをるが、其の實管仲商鞅等に似てをるのであります。随つて道徳といふとも畢竟は政治となつてしまひ、學文も功利に歸してしまふこととなり、教育も材物養成のみを主とするに至つたのであります。さればこそ仁は民を安んずるにあり、智は人を知るにあり、之れが徳であるが、即ち政治であるとしてをりまして、國民の習慣風俗を改良するのが、聖人の大道術であるといふて、禮樂は實に其要具なりと致してをる。又仁齋の活物説に贊して、「人は活物なり」と絶叫し、政治上最も人を以て肝要なりとし、第一自ら經驗を積み、人を試用の上、材器ある者には委任して、之れを活用すべしと申してをります。いづれも政治を中心としてをるとは火を賭るよりも明かである。蓋し彼は儒教も

儒學も全然政治經濟を以て本領とするものであるとした所から來たので、之れは儒教の真相特色を極端に解せるものといふべく、されど偏見といふよりかむしろ徂徠の特見としてよろしからうと思はれます。

〔宗教的見解〕。徂徠は宗教的見解を有せしことは、前陳の外に、聖門の第一義として、天を敬へよといふてをるが、是れ天命に任するの意で、即ち天力に歸依信順するとであつて、亦全く宗教的であるといふべきであります。其の他専ら聖人を信仰すると、理も聖も道も不可思議的なりと解したること、教は己れを信する者に施すといふと、宿善開發説に近き得道法を考へゐたると等である。又神道に對しても、近來のものは卜部兼俱などの作り事であるが、文字傳はらざる以前よりあるものは、祖考を祭りて天に配し、天と祖考とを一つにして何事をも鬼神の命を以て取り行ふたのであるとし、是れ又唐虞（堯舜）三代の古道なりと曰ひ、更に「聖人の道は天を敬し祖宗を敬し候事を本と致し候」とも説き、儒教の天命を敬して民を安んじ世を治め行くと同じ道としてをるのであつて、國神の崇敬を主張し、國體の尊重を領解してをつたとは確かでありませう。

〔總結〕。要するに、徂徠の説は粗漏缺陷が少くないけれども功利主義を立て、實利的觀念、活動的思想を鼓吹し、又た仁齋等の私徳を専らとし、利己的に陥り、且つ消極的になり易きを、彼は公德を重んじ、利他的積極的氣風を養成せんとして、専ら社會的徳徳を主張したとは、實に日本倫理學史上のみならず、博く東洋の倫理學史上において特筆大書すべき功績であります。然れども惜いとは彼の實行につきては非難すべき點多く、文才や識見や英氣は餘りありしといへど、傲慢で放肆で、世にいふ豪傑を氣取つて、浮華を尙び、文藝に耽り、敢て精研を爲さず、放言高論に傾けるの風ありて、其の徳の足らざりしたため、徒らに風流の才子や實用の人物を出だしたのみで、其の弊害の厭ふべきものがあつたのである。

〔仁齋との比較〕。終りに臨みて、簡單に仁齋と徂徠との異點を表記してみませう。

- (一) 仁齋は道を仁義とし、徂徠は禮樂とした。
- (二) 古義學に古文辭學。
- (三) 四端擴充説（自我實現説）に功利主義。
- (四) 道は自然に出づ、他は人為に出づとす。
- (五) 仁は仁義禮智は道德の名とし、徂は仁智は徳禮義は道とす。
- (六) 一は徳性（個人的徳）又私徳を、他は政治（社會的徳）又公德を尙ぶ。
- (七) 問學を爲し、他は考證を爲す。

(八) 聖人を學び（復古的なるも）、聖人を信す（復古的なるも）。

(九) 仁は孟子を尙び、徂は荀子を尙ぶ。十、一は君子（主義は活動的）、他は豪傑（主義は活動的）。を目的とす。

〔附説〕 徂徠の門流

門人には、太宰春臺を初め、山縣周南、服部南郭、安藤東野、平野金華、高野蘭亭、宇佐美澂水、徂徠を併せて以上の八人を濶園の八子といふ。餘熊耳、三浦竹溪、鷹見爽鳩、越智雲夢、山井崑崙、釋萬菴、釋大潮、根本武夷、木村蓬萊、菅谷甘谷、田中冠帶等あり、又其の流派を汲みたる者にも、弟北溪、養嗣金谷、其の子鳳鳴等を初め、成島錦江、菅沼東郭、赤松太庚、龍草庵、市川鶴鳴、岳東海、伊東藍田、齋藤芝山、龜井南冥、同昭陽、藤澤東畝等あれども、概ね文辭家若しくは事功家にして、學説上稍見るべきは、僅に唯一の春臺、又紫芝園と號すばかりである。但し周南も少しは傳ふる事蹟があるが、どうしても一體に寂寥の感に堪へぬのであります。

春臺（和元二三四〇年生）は家庭において蚤に、藤樹、蕃山の影響を受け、後程朱學を修め、又老莊佛等を學びしが、一旦徂徠に接するに、迨んで全く之れに歸し、専ら徂徠

の二辨^{辨名}を宗としてをつた。然れども人と爲りは嚴毅端方時に峻刻を極めたともあるが、至誠を積み、從容に慣れ、禮法を以て自ら任し、徳行を重んじたとは、大いに徂徠と趣を異にしてをる。故に往々其の師の動作を非難し、却つて仁齋を景仰してをる。蓋し徂徠の學と仁齋の行とを併重した者と思はれる。其の學は徂徠と同様で、教も徳も外面的のものとし、甚だしきは、内心には如何にもあれ、外面に禮義を守る者を君子とすと曰ひ、さては本能主義を唱へ、無心無念にて天然自然にてなす事は皆天性のしわざなり、是れを名づけて誠といふ、中庸の旨なりと申してをり、究理を拒否し、聖人を絶對標準として信仰し、禮義を以て制心裁事の教則とし、自己を以て至愚陋劣たると只一向門徒の如しと爲し、此の如くにして安心立命して、不動の境致に到達してをる。甚だ宗教に近いのである。又信と斷と勤とを以て修學の工夫^{三字}と爲し、孟子を誹議し、古文辭の弊を痛撃して、間々徂徠の上に出てをる點があります。

周南^{紀元二二四一二年卒}は稍諸弟子中異彩を放つて、性行は溫良剛雅で持論も平正に近い。仁齋の宋學駁論を賛し、且つ世に仁齋が明末吳蘇原の「吉齊漫錄」に依つた

といふ評判を斥けてをり、又本邦を尊重して、一姓君たると全國統一のと、封建制存續して仁天下に浴ねきとの三者は宇宙に超絶してをるといふてをると等で、つまり徳行の點において聊か稱すべきばかりである。

因みに護國派に近似して、多少其の宣布に功あつた者は、二宮尊徳、齋藤芝山、帆足愚亭等で、中にも二宮氏は最も實際的に功利主義、經驗説を發達せしめた者である。されど徂徠學の繁昌は元文寛延の頃、二三十年間であつたのであります。

〔餘説〕復古學派の三傑と宋儒との差異

第一、素行對宋儒素は活動主義、實行的、宋は寂靜主義、學究的

- (一) 仁を、素は五常を兼ねるものにて、聖人の教の極致とし、宋は性とし、理に歸せり。
- (二) 理を、素は條理、倫理秩序の意とし、宋は性及天、本體又は實在とせり。
- (三) 性を、素は天命にして、理氣を合せるもの、善惡を以て云ふべからずとし、宋は孟子の性善説に依り、之に本然氣質の性ありとす。

(四) 太極を、素は前後本末を含蓄せる所とし、宋は無極を立てたり。

(五) 敬を、素は禮と併存すとし、宋は學問の本領とし、靜坐寂念の事とせり。

第二、仁齋對宋儒略同前なるも、仁は生生主義進化主義、又理想主義の倫理說也。

- (一) 宋は理氣二元論、仁は氣の一元說を執れり。
- (二) 宋は復性復初を説き、仁は具存せる性を發展すべしとす。
- (三) 宋は性を二種とするも、仁は氣質を性とせり、善とせり。
- (四) 宋は太極、天性、仁を理にて解し、靜止的なるを、仁は一元氣にして活物とせり。
- (五) 宋は學究的なるも、仁は併に徳行的にして、此を本とし、彼を功とせり。

第三、徂對宋儒略同前なれど、徂は政治的功利主義也。

- (一) 道を、徂は人爲的にして禮樂刑政とし、宋は先天的にして理とせり。
- (二) 氣質を、徂は不變化とし、宋は變化とせり。
- (三) 徂は文雅風采を尙び、宋は心法理屈を尙ぶ。
- (四) 徂は一元論にして單に氣質の性のみ、惡を取り、宋は二元論にして本然氣質の兩性を立つ。
- (五) 徂は政治を主とし活動主義を賛す、宋は修徳を主とし寂靜主義也。

第十章 心學派

第一節 石田梅巖の學說

(小傳) 梅巖、名は興長、通稱は湖平、梅巖は其の號である。靈元天皇の貞享二年(紀元二三四五年)西洋紀元一六八五年、五代將軍綱吉の時分て、恰度山鹿素行の歿した年に、丹波國桑田郡東縣村に生まれた。父を淨心と云ひ、母は角氏の女である。父は其の名から考ふれば、どうも佛教中にも淨土教に歸依してをつた人のやうである。此の方正篤實なる兩親が教育の下に人となつたのであるが、二十三歳京都に出かけて、某老輔の備人となり、以て立身出世の基を定めやうとしたのである。彼れ初め郷里に在る頃から、耳を神道に傾け、私かに以て皇國の政令と爲し、國民の必ず知了して自尊自重すべき者と思惟してをつたものであるが、京都に來て後は、親しく朝廷を拜し、神宮に詣づるにつれて、いよく其の念を厚らし、業務の餘暇諸種の神書を閱讀し、竟に、手は鈴を振りて、人の門に立つも、戸毎に此の道を勸むる所あらんと申して、而も自ら聖賢の言行を法則とし、之れを平常に

實行して、衆人の模範にならうといふとを心がくるに至りました。後更に儒道
 を學びて、主に孟子の性善説、朱子の性理説を究め、又禪門に出入して自性見得の
 工夫を凝らしてをつた。三十五歳主家を辭して自活の道を得てからは、専ら了
 雲禪師といふに參學したが、一朝烏雀の軒を繞りて囀るに氣が注ぎ、忽然道は自
 然に在りと大悟したのである。そこで一心に世教人倫の爲に盡瘁せうと思ひ
 こんで、四十五歳の時、京都車屋町通御池に講席を開き、無縁にても御望の方々は
 御通り御聞き可被成候といふ表札を掲て、自家獨得の道義を説述したのである。
 其の方法は先づ、小學から始めて、論語に進み、又徒然草、謡曲を用ひ、後竟に見性悟
 道に迫んだので、以て彼が主義とする所を知ることができる。彼は何事をも頗
 る平易單的に立説して、而も實行に適切なるやう、又世俗の解得するやうにして、
 斷えて高論を口にせず、虚儀を身にせずして、徹頭徹尾、平民的道德家として、効績
 を擧げた者であります。櫻町天皇の延享元年、紀元二四〇四年—西洋紀元一七
 四四年（七代將軍吉宗の末年）壽六十歳で病死した。其の著書は、都鄙問答四卷、齊家論、要訓
 商家童問答各一卷である。猶又後人の編輯にかゝる、石田梅巖語錄二十四卷、及

び、石田先生遺稿一卷がある

《心學の起源》。徳川氏時代の中葉天下の昌平につれて、平民社會は極めて自利私
 欲に耽り、華奢虚偽に流れ、随つて道德頹廢して、とても救ふことができぬやうな始
 末になり、其の上從來此の社會を主に教化してをつた所の佛教が淫靡になり、怠慢
 になつたからして、却つて害毒を流したことが少くなかつたので、ますます、腐敗に
 腐敗をかさねたのである。かの武士社會には既に儒教あり、武士道あり、且つ神道
 又禪宗などがあつて、其の成績甚だ美なるものがあつたにも拘はらず、この平民社
 會には全く之れと缺いてをり、幕府も亦何等の施設する所がなく、又勸奨する所が
 なかつたのである。そこで享保の末頃から其の缺陷を補ひ頹廢を治せんとして心
 學なるものが起つて來たものであります、而して其の内容は敢て斬新でなく、又特
 殊のものでもなく、つまりこれまで行はれてゐたものに就て其の精要を採つて、之
 れを和諧し活用し、以て實際に供せしめたるものに外ならぬのである。換言すれ
 ば、唯神儒佛三教の渾成にかゝる者を極めて平易親切に庶民に説話した所の、一種
 の調和的倫理説にして、むしろ通俗的道德教と稱すべきものであります。而して

其の名の起りを考ふるに蓋し梅巖の高足たる手島堵庵に至つて主に手島學と曰ふたのを更に堵庵の高弟なる中澤道二が江戸に唱道するに及んで白河樂翁定松平の讚稱する所となり當流は心の學びなるに依り名義を更に心學と改めては然らずやと注意せられたからしてそこで始て心學といふ名稱が傳はつたやうである。然し陽明學も亦或は心學の名稱を以てするところがあるからして更に梅巖の姓を探りて石門の二字を冠し之れを石門心學と正しく稱してをる。然し普通は單に心學といふてをります。

〔梅巖の學要〕。彼の學は其の名の示す通りに單に心の學びである。言ひ換ふれば心を知りて身に行ふ事を究明するものにして畢竟修身學である道徳教である。而も其甚だ通俗的のものである又極めて平民的のものであるそれであるから敢て高遠なる宇宙論又精緻なる人生觀を有してをるものでない。さりながら確かに修身學又道徳教として一種の倫理説たる價值ある以上はどうしても多少は宇宙の本體や人生の真相に説き及んでをらぬといふとはできぬ。而も隨分見るに足るものがあるのである。今先づ其の主要とする所をかいてみませう。

〔宇宙觀〕。宇宙の本體につきての梅巖が意見は大概朱子の説竝に易繫辭傳の言に順つてをる。即ち太極は天地人の體にして而も物を生ずるの理を備へてをるものであるから之れを以て直ちに理と名づくべきものであるとしてをる。曰はく天地人の三を窮め盡くすときは一箇の理なりと。而して其の理を解して曰はく理と云ふは天地より人間畜類草木まで行はるゝ道それらに分れ備はりたる體を假りに名付けて理といふと。此の如くして以て又之れを乾とも天とも道天道又大道とも命とも性とも仁とも又元氣とも稱すべきものとしてをる。惣して皆一體である一物であるかの孟子の云へるが如く全く生死を離れたもので絶對なる至妙至善の實在と解してをる。此の理あるに依り否此の理からして先づ陰陽を生して天地ありそこで天地の道が流行するのである。元來天地は無心なれとも萬物生々して古今遠はず其の生生を繼ぐ物を善といふ。分ちて云へば天は形ならして心の如きものであり地は形有て物の如きものである。其の生生する所は活物の如くて其無心なる所は死物の如くてある。天地は死活の二を兼ねた物である。死活の二を兼ねずぶるが故に万物の體となつてをるとする。

天—心(無形) —死活—體—理—性—善惡
地—物(有形)

此の如き天地は元來一陰一陽より成る。一陰一陽の流行は即ち是れ道である。之れに依りて動靜が起る。靜は體又常にして乾又理である。動は用又變にして元亨利貞であり又命である。二者相並びて道行はる。之れを善と爲すのである。其理といふは淵の如く、その命は川の如してあつて動靜は有りながら全く一である。命は天の行はるゝ總名理は其の體なると決せりである。恰も吾人に一呼吸相列びて生理生命を全うするやうなものである。此の體あり此の用ありて天道は行はるゝのである。即ち萬物は生長發育する事ができるのである。曰はく天道は萬物を生して万物に天の賦し與ふる理は同じと雖も形に貴賤ありと。又曰はく雀はチウ、鳥はカウ、松は緑に櫻は花、羽衣ある物は空を飛び、鱗あるものは水を泳り、日月の天に懸るも皆一理なりと。

天地—一陰一陽—道—
—靜—體—常—
—動—用—變—元亨利貞—命—
—理—

〔人生觀〕次に人生については如何といふに。人も亦固より此の天地陰陽の道に依つて生育する者である。然し其の本體は生死一致であつて理である。其の本心も亦同様で理である。つまり人性は即ち是れ天性である。委しく云へば。人の心は虚にして天の如く、形は塞にして地の如し。其の呼吸に於いて又其の動靜に於いて陰陽が現はれてをると同じである。而も其の人は全體一箇の小天地である。一物の中に万物の理はこもつてをる。他の万物には唯地の物あるばかりで天の心はない。即ち偏廢してをるものである。故に萬物になくして、只獨り人のみにある所の天の心を以て直ちに是れ人なりと云ふともでき、又は人の心を以て直ちに天であると云ふともできるのである。尙云ひ換ふれば。人即ち天なり。天人一なり、一致なりである。隨つて道は一であつて、人の外に道なく、道の外に人はない、人道全く天道である。是れ人は天の靈にして、万物の靈長たり尊貴たる所以であつて、萬物はどうしても下賤なものであるわけがらである。而して其の萬物の中につきても、固より其の偏廢の多少があつて、之れがために貴賤上下の別がある。蓋し天道は其の生した物で以て、其の又生した物を養はしむるので

貴き物が賤しき物を食ふは當然であると説くに至つた。

人 心 天
形 地

物 形 地

天心 人

人心 天

人 天

〔心理説〕。心は一身の主にして、是れ性なり、天なり、理なり、又命なりである。而して之れが實に良心道心にして、仁義禮智の四徳を備へて、天徳の元亨利貞に配してを。それは、偽りなりと受けつけぬ心で又己れに決断して變らざる能ある者である。乃ち曾子のいはゆる一貫して忠恕なる者で至善である。是れか即ち性善なる所にして、又氣の清明なる所に在りと爲してを。即ち性善を會得すれば氣も亦清明にして、仁義の良心を發す、常に仁義の良心起らば、人事は此に越ゆるとあらんやと申してを。而して其の性の善や絶對善である。形なくして、私慮では窺ひ知るとはできぬけれども、其の體は天地萬物一體の所であつて、陰陽呼吸の相列び相繼ぐの用ある者としてを。孟子は乃ち天地より直きに説いた者であるが、告子は自己の思慮で説いたから間違つてをると曰ふてを。且つ氣については理の發作する所以をいふ、即ち當に形象に現はるべき能力を具するを稱するも

ので、此の如きは聖凡一なりといふへく、聖人、賢人、小人等皆理一性同じきものなりとさへ述べてを。更に性善に關しては、特に次の如くいふてを。孟子の性善は直きに天地なり、如何となれば人の寢入りたるときにも無心にして動くは呼吸の息なり、其呼吸は我が息にはあらず、天地の陰陽が我體に出入し、形の動くは天地浩然の氣なり、我と天地と渾然たる一物なりと貫通する所より人の性は善なりと説き、玉ふと。以て孟子の性善及び養氣の説を贊してを。つまり性は體につき、氣は形につきて名稱を別にするばかりで、其の本や一、其の用や相合せる者としてをるのであります。然るに人には身軀形骸にくつゝいてをる所の七情〔喜怒哀懼愛惡欲〕があつて、性善も之れに蔽ひ味まされて、私知、人心、人欲を生して天命に反して一に自他を區別し、敢て天地萬物一體なるの理を忘却し、性を失ひ、氣を過まつもので、此れ百惡の生する所、又聖凡の別るゝ所以であるとなりました。赤子は未知の聖人なり、私知私欲なきが故なりと曰ふ一語は其のうらを申したのである。

〔認識論〕。特に認識論的説明を爲して曰はく、我は萬物の一なり、萬物は天より生まるゝ子なり、汝萬物に對せずして、何によつて心を生すべきや、是れ萬物は心なる

所なり、寒來れば身屈し暑來れば身伸ふ、寒暑は直に心なり。と即ち客觀的實在と主觀的實在とは同一にして、全く自他を超絶せる所のものと爲し、いとも高妙なる見地に立てるの觀があります。又仁義禮智の性(又良心)は古今相續いて變らず、是れ天地に有りては元亨利貞といふ、名は替れども萬物の理は一なり」と曰ひて、人心を解釋するに、すべて天地を以てしたとなど、皆認識論的説明と申すべきである。但し前の七情の本源、及び之れと宇宙の本体や實在との關係に至つては、全く説明してをらぬのは缺點であります。

〔倫理説〕さてこれから彼の本領たり、精髓たる所の倫理説を述べやう。彼が先天良心説を執るとは前陳の如くであるが、吾人は須らく先づ直接に其の良心が天性であるから、其の心を知り、其の性を知らなければならぬ。是れ聖賢以來學問の要旨とする所である。特に此の學問の道を盡くし玉ふは大聖孔子である。即ち義を積み浩然の氣を養ひ、至大至剛にして、天地に充つるの徳に至り玉ふた人である。其の道は聖道と名づくべきであるが、固天道に合ふ所の人道に外ならぬので、つまり孝悌忠信に歸するのである。曰はく、人倫の大原は天に出矣。是れ自然

の道、天然の道である。又曰はく、儒には仁義禮智信の五常と君臣父子夫婦兄弟朋友の五倫とを天の道とし天人一致とす。此の天人一致の道を知り、天地萬物一體の心性、即ち生物の心、即ち仁心、即ち性善を覺る心、即ち開悟の念が現はるゝと共に、無心となり、無我となり、無欲となりて、遂に之が體となり、己となりて、五倫の用行はるゝに至るのである。曰く、天を知れば事理自ら明白なり、之を以て私なく公にして、日月の普く照し玉ふが如しと。又曰はく、人は天地物を生ずるの心を得て心とするなれば人物をはごくみ育ふを以て要とす。此に至つては、豈貴賤上下の別あらんや、聖人は民を養ふを以て本とす、吾人も亦之れに法りて本を行ふべきである。而して此の如く之れを行はするものは即ち實に仁義禮智の良心でありませす。畢竟心性を知得するを先要とすべし。心性を知得さへすれば、志強く義理昭かにして行ひ易く上達すべし。大學も明明徳を本とし、中庸も率性を基とす。皆知心を先とすべきを意味するのである。學問といふも此に始終し、此に結極するのである。然れども行はずんば知得せる者といふとはできぬ。身に行はざれば賢人ではない。即ち知行併行するがよいのである。學問の要も亦行を本とす

るのである。曰はく「學問の道は第一に身を敬し、義を以て君を貴び、仁愛を以て父母に事へまつり、信以て友に交はり、廣く人を愛し、貧窮の人を憐み、功あれども伐らず、衣類諸道具等に至るまで、約を守りて美麗をなさず、家業に疎からず、財寶は入るを量りて出だすとを知り、法を守りて家を治む」と。若し之れを實行する者ならば、雖曰「未學、吾必謂之學矣」。要するに、知るとも、學ぶとも、教ゆるとも、又經書も、聖人も、眞儒も、皆人倫を明かにして行はするに在ると明言し、即ち倫理徳行の範圍を出でざるものといたしてをる。蓋し或點に於いては殆んど陽明の知行合一説に合一してをるものである。其の結果は、足るを知り、分を守り、天命に順ひて、心歡喜し、身は安樂となるべし。然し若し人欲に掩はれんか、常に晦冥迷惑して、苦惱止むとがない。故に苟くも之れが耻を嫌はば、須らく學びて徳を養ひ、得心躬行すべきものである。即ち明白ではあれど、言句の絶えたる、天道の流行を明察して、天の心を會得し、信心堅固にして決定すべしとしたものである。

〔實踐論〕。而して其の實踐躬行するに當りては、雙方共に宜しきやう、萬物の共に利益あるやうにして、人倫は萬事禮義に由るべしとし、其の中孝に就きては、舜は孝

道を盡したる人にして、父母の心に逆はず、我顔色温和にして、親の心を痛めざるやう事へまつらば、孝行とも云ふべきか、又心を知るときは、孝の道をそこなはず、父母の悪事を止め、父母を道に向はしむ、又道ある父母ならば、心自ら合ふべしとも申し、更に曾子を稱し、親の前にては、犬や馬さへ怒りて叱らず、父母に事ふるの道は、愛と敬との二つ也、そもく子たる者は、父母に對して是非を論するものにあらず、何事も心まかせざるべし、特に嚴君は家の主にして、君の如く、妻子は家來の如しとも曰ひて、殆んど孝を以て絶對的服従と爲し、就中嚴君至上主義を執つた者である。臣道につきては、堯は君道を盡せる者なるが、臣道を盡せるは周公なりとして曰はく「臣は率なり、心常に君に牽るゝなり、臣下の飯と汁は君より給はる、俸祿なり、其祿なく、孰て何を以てか命をつぐべきや、このゆへに我が身を委ねて君の身に代り、露塵ほども我身を顧みざるは、臣の道なり」。又臣は政ごとに従ふものなり、下を使ふは君の道を以て治むべし、即ち一方に於ては仁、一方に於ては義を以て、君を正し、國を治むべく、而も亦先づ心を知りて志を定むべしといした。其の他、主僕の關係も親子の如くなるべく、又親類に對しては、深切に治むる役人の如くなるべしと説い

た。凡そ五常五倫行はるれば、國も天下も治まるのであるとしてを。是れ亦儒教と全然其の轍を一にするものである。更に進んで天下は恰も大佛殿の如く、一家は恰も其の雛形の如しと説き、而して共に仁に歸して、畢竟其の初めは心に性善を知りて、身に孝弟を行ふにあるのであるから、人たる者は常に自己の心を知り性に願みて之れに率つて行くとを力めなければならぬと申した。士農工商皆其の本一にして等しく天下の臣たり輔たる者である、随つて其の行ふ事は違つてゐても道は全く一であるべきもので、たとひ乞食といへども道はあるぞと曰ふてを。其の平民主義なるといよく、以て明かてあります。

〔商業道德〕。梅巖の説法は専ら商人道德に關するものであつて、よほど詳密を極めてを。商人にも勿論學問して知心の必要がある。然すれば正直にして打ち解け善き者となり、凡て道に合ふて榮ゆるとを得るのである。商人の賣利を得るは天下御免の祿にして正直なる所である。但し決して貪ぼるとを爲さず、慾を離れ、仁心を以て勉むべきものといした。尙明かに商人の心得を記述してをるやう。一事に因りて萬事を知るを第一とす、又、我身を養はるゝ賣先を疎末にせず、其

上儉約を守り、正直にして清潔なると士を法とすべし、商人の道といふとも何んを士農工の道に替はると有らんや、孟子も道は一なりとの玉ふ、士農工商ともに天の一物なり、天に二つの道あらんやと。次に商人奉公の道は主を大切にし、正直に公すべきと、商人は農工と一列に下賤なれば、木綿服にて可なり、分を守りて儉約なると、勞働すべきと、經濟的に聚むべき物は能く聚め、散しては聚め、聚めては散すると、國家を治むるも同様なると、貸借嚴重なると、慈愛なると、恩施すると等であると致しました。特に短氣は氣隨より來たものであるとして、大いに誠しめてをります。兎に角古來最も卑しめられてゐた所の商人をして、最も尊ばれてゐた所の士人と同等なるものと曰ひて、ねうちづけたことは、當時にありてはいとも奇抜なる見解といはねばなりません。

〔殺生、賄賂、鬼神につき〕。殺生のとも衣食住の用に供する物ならば、是れむしろ天道の自然にして其の生したる物が其の生したるを喰ふ、形に貴賤あり、貴さが賤きを食ふは天の道なりと曰ひ、此の點において小乗佛教の戒行を嘲笑してをります。又賄賂を取れば天知る地知る我知る人知るであるから、終にはあらはれて天の罰

を受くべし、頼む者も頼まるゝ者も共に罪はあるが、然し七分の罪は上にあり、上の清潔を法とするは古よりの道なりといふた。鬼神に對しては敬遠し、禱るに誠を以てし決して自利私益を請ふべきではない。元來神明は清淨潔白の水上にして神を信仰するは、つまり心を清淨ならしむるにあるのだと申してをる。蓋し彼が道德上の特殊的説明も亦皆正當にして適切直ちに以て吾人日常の教訓と爲すものと考えます。

〔神道につき〕。彼の説は全然孔孟程朱の説を平易適切ならしめた者であるが、外に亦大いに注目すべき點がある。即ち彼はやはり日本の神道を主本として、古より神道の相けに儒道を用ひ玉ふ。「我朝の神明も伊弉諾尊伊弉册尊より受け玉ひ、日月星辰より萬物に至るまで總べ主り玉ひ、残り所なきゆへに唯一にして神國とは云へり。」天照大神は神靈の御徳、寶鏡寶劔の御徳見はれ玉ふ御神也、中庸に所謂自誠明謂之性者にして天道也、天忍穂耳尊は中庸に所謂自明誠謂之教者にして教に由りて神靈の御徳に入り玉ふ所也、代々の君誠又明を以て天下を平かに治めたまふ也と申した。つまり日本宗廟天照皇大神宮を宗源と貴び奉り、皇太神宮御寶

勅に任かせ、萬づくだくしきを拂ひ捨て、一心の定まれる法を尋ねて天の神の命に合ふとが是れ我が國民の主義方針とすべき所としたのである。神書に傳ふる天地開闢の説に關しても、彼は毫も之れを疑ふことなく、神聖は天地至る所にましく、心の明かなる者獨り之れを窺ふとを得べし、蓋し是れ古今不變の理にして、天人一致今日に至り、人間畜類まで銘々繼ぎ來る者は理なり、其跡微妙なるも、人にして能く此一理を明にし得るならば、其時にこそ神聖生、其中國常立尊と號すとの玉ふとを知覺し、天の與ふる樂みを得て、實の道に入るべしと申した。更に進んでは、天地開闢の理は我が一身にも具れりと曰ひて、主に彼が宇宙觀を以て神道を解し、之れを神聖尊嚴にして、而も至極近易適實なるものと致したのである。即ち歴史的起源と實體的根本とを同一視したるものに外ならぬのである。又心學の心學たる所以をも此に於て明かにするものといふべきであります。

〔儒佛につき〕。次に儒佛の比較は彼において最も見るべきの説である。彼は先づ佛敎に大小二乘ありて、小乘は私知思慮分別を交ゆるものなるが大乗は本來無我無法を顯示するものにして眞理を説くものなれば、聖人の道が一途渾然たる所

より行はれ、無爲にして治まるものと何ぞ撰ばんと曰ふてをる。然れども佛は心を清すの法にして出家のみに限るべきものである。俗家にては身に行ひ家を齊ひ國天下を治むる法としては儒道を以て善とすべし。然るに若し佛法を以て世法を治めんとするは、馬駕籠にて海川を渡るに同じと斷ずるに至つた。又佛教に於いては三世を語り末世を言ふけれども儒道にては道一也性一也古今の變異なしとするので道は至る所にあり、性は人毎にあるから、何ぞ末世と云はん、又何を過去の因縁と云はんや。況して儒には五倫五常を以て天の道とすれども、其の外形行儀は實に雲泥の違あり。然し互に根本の所は性理を會得するを要としてをる。天臺の止觀も、眞言の阿字本不生も、禪の本來面目も、念佛の入我我入、機法一跡も、日蓮の妙法も、修行熟して至る所は一である。「壽量無邊經」に「佛告文殊言無心無念之本佛、以不思議爲躰、無本去來、無三身性、無十界性」と曰へるものは是れなり。然し有に對する差別的の無てはない。法性である。此の法性を覺れば生死の迷を離るのである。儒にても性理の至極に至れば、無聲無臭なりとする。而も共に慈愛の心を本とする。同じく我が心を得れば、即ち儒佛の名を離るゝのである。佛は覺

なり、三界唯一心の理を覺りたるもの、即ち佛性である。佛性は天地人の躰である。佛教もつまり此の性を知るの外はない。見性成佛とは之れである。儒も亦道の大原天に出づるか故、天の命之れを性とひ、性に率へば人の道なりと説く。此の性は即ち天地人の躰である。されば儒佛共に悟る心は一である。いづれの法にて得るとも皆我が心を得るのである。佛の法性といふも敢て天地の外に去るといふとでなくして唯名字を離れたる絶對の境を云ふのである。儒と同じく無私なり、無我なり此の如く道に信仰あるこそ聖人の學問なれ。禪悟も聖人の道の極致と同じであると説いた。更に神道も同斷である。老莊の教も心をみかく磨種カクカクなれば舍つべきものでもない。一度琢きて後は、佛老莊より百家衆技の類を寄せ聚めて見ても、心は鏡の如く、物來る時は即ち應し物去る時は即ち靈々として一物を止めず、此の心を得て後に聖人の教に向はゞ、明鏡に對して我が形を見るやうである。天地萬物の上を見るも、惟一理にして、我が掌を見ると同じである。畢竟唯其心を執り、餘は儒の説く所の法に順ふべしとしたのである。

〔淨土宗につき〕。尙淨土宗につきては梅巖は大いに同情を表してをる。其は西

方極樂へ往生し、彼の國に至つて如來の説法を聞き、悟りを開き、成佛すといふ教である。彼の國とは唯心の淨土といふのが佛教の本義である。淨土といふも我が心のとて、之れを博く云へば十方淨土である。元來往生といふも、自心往生のことで、往がずして往くとを名づけて往生とするのである。此の如くして既に南無阿彌陀佛になれば我れといふものあるべきや。彌陀を念する行者も念せらるゝ方の佛も雙方共に一體に成り、苦樂の二つを離れ終りて無心無念の不可思議となる。即ち是れ自然悟道の處にして、能所不二、機法一體の絶對界に逍遙し遍滿するのである。かやうに唯心の淨土又己心の彌陀なれば、娑婆即ち寂光土である。草木國土悉皆成佛にして、森羅萬象悉く一佛であるから、柳は綠花は紅と分れて、己が法を説くのである。故に吾人は一心不亂の修行を以て此所に至り、九品の淨土を目前に拜むべし。是れ即ち諸法實相の所である。而して淨土宗は念佛にて法性に至り、自然に悟道をする。釋尊の法性を悟り、一佛成道し玉ふと一つ事である。本來法性に二なき故に南無阿彌陀佛にて事足るべきものと申した。其の云ふ所頗る眞要を得てを、つて恰度淨土宗師の説法を聞くやうな心地がする。是亦彼が得

意の立脚地よりして自然に妙會煥發し來つた所で、誠に剴切の趣があります。

〔總結〕。要するに、梅巖の學説はまだ精到ではないけれども、其の基礎を教學の上に置きて、天地萬物は一體、一理、一性にして、吾人の心も亦然なり然らざるべからざるものであるから、此の心を知り得るとが、學問徳教の始終であると致しました。是れ心學の心學たる所以で、極めて肝要を得てを、つて、實踐上に功力あるものであります。然し其の身は之れを形と云ひて、全く別視したやうで、天地萬物一體ならざる所、即ち我情の發する所、私欲の萌す所と見做し、之れに順はざるが善たり道なりと爲したやうである。されど彼は積極的倫理説を主張し、専ら心を知れよ心を待よと申して、慈直に本原の究明に熱中したゝめに、消極的方面は自然に粗漏になつたもので、恭敬謙讓克己復禮等の説は殆んどいふてない。蓋し是れは佛教の實踐的なるに執りて、宗教的風趣を帯びた結果であらうと思はれる。當代普通儒者が迂濶に流れ、佛家も懶惰に陥つたのに對して、彼は民衆を立所に道に入り本に至らせんとした者で、畢竟平民教の平民教たる所以と謂はねばならぬ。凡そ知識ある者には消極的教化を要するに反して、蒙昧なる者には積極的教化を要すると、恰度

小兒のやうであつて、儒教や禪宗等が士流以上に要あると共に、此の心學は淨土宗と共に平民社會に要あるもので、現に其の教化を施してゐたのである。さても梅巖の識見や俊功績や偉といふべきであります。

第二節 全門、堵庵、兼葭、道二等の學說

梅巖の門下、其の數甚だ多かるべきも、今其の詳細がわからぬ。唯手島全門、同堵庵父子の外、慈音尼薩謨なる者が著はれてをるばかりである。

全門 名は宗義、通稱近江屋仁兵衛、京都六角町に住んでゐた商人である。梅巖に依りて心學者となり、全門又は蓋岳と號し、梅巖の死後は代りて講説したのである。「子弟訓」「商人夜話草」「塵とり」を著はしてをる。其の説は珍らしくはないが、懇ろに道德の肝要を述べてをる。就中「子弟訓」が一番である。之れに依れば、彼は朱子の説、特に其の最も近切なる小學を執りて實踐倫理の規範としたやうである。人は生得性善であつて、一毫の惡もない。然し是れ教に依つて開發せられ完全に實現せらるべきである。即ち五常の徳備はり五倫の道行はるゝに至るのである。人の道といふも此の外にはない。教といふも之を詳明に訓示し正確に修練せしむるものである。そうなれば固有の良心は自然に完成して善惡を識別し惡を去り善を勵むものとしたと知らるゝ。而して歌を以て五常を説いてをる。

仁。他をめぐみ我をわすれて物ごとくに慈悲ある人を仁としるべし。

義。へつらはずあごることなくあらそはず欲をはなれて義理をあんぜよ。

禮。君をあふぎ臣をおもひてかりそめもたかさいやしき禮儀みだすな。

智。何事も其しなくを知る人をひろくたづねて他をなをしりそ。

信。心いと直かるべしと祈りつゝあしきをすてよきをともなへ。

又利他を仁、守約を義、應分を禮、辨別を智、實着を信とも解してをる。尙五倫については詳密に指示してをる。孝は天の道を用ひ、己が職をつとめ、身をほこらず、金銀をみだりにせずほどよく用ひ、父母を養ふとなりとし。忠に關しては親に孝行をする心を持ちて主人につかふべし、主人のために命を捨つるも直ちに親への孝行である、身をまかせ、一毛の私なく、又諫をむねとして奉公せよと曰ふて、忠孝一本説を立てゝをる。夫婦に關しては一夫一婦主義を執り、妾を置くと道にあらずと喝破した。其の他兄弟長幼の間柄も皆親子の如くなるべしといひ、朋友は只我にまされる友をしたしむべし、少しにても我に劣れる友には交るべからずと申してをる。而して之を實行するには、究理に依り、慎獨に依り、敬行に依るべし。特に敬

は生れるから死するまで離るゝとならぬものぞ。學問といふも敬をはなれず、其物其事の理を明らむるとなり、而も仁義禮智皆此内にあるぞと曰ひ。身を惜むを大事とし、行儀作法を隨ひべしと説いた。若し夫れ人にして教なからんか、私欲に耽溺するに至り、遂に親一類に見捨られ諸人に疎まれて、悪人となりはつべしと曰ふてをる。此の外に高上な事を云はず、始終實踐倫理の範圍を出てぬものであります。

堵庵

全門の子で、名は信、又喬房、字は應元、小字宗吉郎、長じて源右衛門、後嘉右衛門と稱した。晩年洛東智恩院町にゐたから世に東郭先生と呼んだが、後富小路三條上る朝倉街に移つたから朝倉隱居といひ、其の學舎を五樂舎と稱した。(享保三年) 紀元二三七八、西洋紀元一七一八年、天明六年、二四四六年、西一七八六年、露艦蝦夷に來りし年、卒、壽六十九歳。其の著は、坐談隨筆、知心辨疑、會友大旨、爲學玉筍、新實語教、町人身體直し、女冥加集、安樂問辨、明德和贊等、二十餘篇で、儒學に關するものも大分あります。彼の家は富裕であつたから、少しも束修を取らず、極氣輕に又親切に誰何の別なく教授したものである。されば車夫馬丁に至るま

て其の門に羣集するといふ有様で、皆仰いで手島先生と稱へ、或は聖人と呼ぶ者もあつたのであります。其の人と爲りは物を伸ばして己れを屈し、分を守りて望みを絶ち自ら奉すること甚だ薄くして、施與には吝まざるといふ風である。而して常に人をして自然に本心を見、眞性を知らしめんとする者で、先づ物を敲いて問ふて曰ふやう、是れ何ぞや、又掌を拍ちて曰ふやう、聲何れより出づと。要するに其の教え方は己れ自らを見得究明せしむるにあるのであります。さて其のいはゆる心學の要旨に曰、固有の本心のはしを知らせ、其明德の光を見うしなはざるやうに慎ましめ、日々に磨きて怠らず、身を修め善に進みてやまざれば、終に心徳の至善を成就するなりと。即ち吾人には先天的良心ありとし、彼は之を本心又大道と名づけ、天命、天賜となし、私なくして、天理の渾然たる一體なる心といふてをる。然し其流行發用の上には格別其の位次第ありて、上を上として敬ひ、下は下として背かず、上下の別を明にし、上下の分を守るは是れ無私自然の正道なり、本心の仁徳明德の表はれてある。其の神明の徳が日本にては大神、唐にては聖人、天竺にては佛菩薩と現じて、或は仁徳の恩を蒙むらしめ、又慈悲の恵を施されて、畢竟五倫和睦して、

万民安全ならんとを計らるゝものである。吾人は元來神の御國に生れた者なれば、殊更に神明を重んじ奉るべし。又此心を固有する者ゆへ、人倫を存するに父母の仁心を以て心とし、傍ら儒佛に依りて修め行ひ、概ね先考古人の爲したまふに従ふべし。凡そ人には人我なるものありて、垢となり、耳目鼻口身に私して、意地となりて私欲を強くし、遂に本心をくらませて、人の道を失ひ、鳥獸に似た者にも成り行くもので、不忠、不孝、不和、不順、不友、不敬、不實、不勉を生ずる。然し如此際にも成り行くも必ず本心の通りに内より發る正直の念を背かず、曲げぬやうにし、敢て外に求めず、専ら内に省みて、自身により得心して天の命ずる職業に就き躬行すべし。尙吾人の生活は都て他力に依らざるものなければ、天地萬物一切の大神を思ひて、我意私爲を絶ち、一念を慎みて、公明正大に實踐する是れ善と説いた。神儒佛は皆正直の道即ち本心の自然に順つて、一念の私欲なきを本とするに於いて一致する。但し神明の徳を奉して、世事は儒教、心事は佛教に依りて治め、内外より此正直の道を助成し、忠孝兩全にして、節儉勤勉なれよと訓誨した。是れ其心學が神儒佛三教の併用渾成たる所以愈々明かて、而も甚だ簡易に實踐上に適切ならしめたと至れり盡

せりである。

兼葭 琵琶湖畔の吉田村に生れ、八歳母を喪ひ、僧の訓諭に依り發心し、十六歳遂に比丘尼となり、種々の苦行を積んだが、最後に梅巖に會ひて悟道し、心學の極致に達した。梅巖の死後、江戸に出て、經書「徒然草」謠曲「都鄙問答」等を講じ、専心心學の宣傳に依りて世道人心を清拭せんと力めた。且つ織手を以て、道得問答を著はし、「人を人と致したき志也」、「士農工商各正直の道にうつらしめんと思ふ」としてをる。彼は女子なればにや、其説大抵卑近である。曰、「一心の門を開けば法界の草木國土佛と云も面白く、柳は緑、花は紅、おのれくが法を説く、實に面白き天の景色かな。一心開悟の曉には、天地萬物悉有佛性の理を知りて、自性と一體なるを得心し、正道を行ふに至るべしとしたのである。而して、儒は政の鏡なり、佛は覺りの鏡なり、神は正直の鏡なり、皆天の一理に歸しおはるに依り、日月星辰森羅萬象と成りて、古今來おこなひすます、又三教共につゝまる所の教の要を得心する時は、生死は言に及ばず、名聞利欲もはなれ安きとなり」と曰ひて、三教は根本一にして作用各別、而も以て調和すとした所是亦心學の特色を見るに足るものである。即ち利己

私思を忘れて、親子兄弟夫婦は勿論、何物に就ても、仁心を以て勤め勵み自己の利害を忍ぶべしと説いたのである。又曰、我身を忘れて道になる人は人也、正直の道をつくして依怙最負せず、人々皆々相續する様に心廣うして善惡共に受け入れて、惡しき人は教へて善人にすゝめ、假初に咄をするとも人の善心に至る様にすべし。唯天地一體の心、即ち仁心を以て萬事を處し萬人に接すべしとしたのである。且つ女子の道徳に關しては、言々親切を極めてをる。其の要は、孝の道よりして、人の妻となり子孫を養育して、其の繼嗣を絶たざるべく、能く三従の道に依り、堪忍和順、毫も私意を用ひず、一家同體の心を以て眞實に謹み行ふにありとした。其の説の感化は大ではないが、近くは中澤道二をして心學を關東に振張するの導火となり、遠くは下層社會殊に其の女子社會に鑑戒を與へて、彼等の情操を矯正したのである。其餘梅巖堵庵等の弟子として、市河正直、杉浦止齋、池田寛月、村松忠宣、手島和庵、富岡某、以直、以尙、盛胤等の名が傳はつてをる。

道二 中澤氏、名は義道、通稱龜屋、久兵衛、京都上京新町一條通に於て父と共に織職をしてをつた。(享保十年、即紀元二三八五年、西洋紀元一七二五年、新井白石歿

せし年、生、享和三年、二四六三年、西一八〇三年、蘭學者前野良澤歿せし年、卒、七十九歳。其家日蓮宗に屬し、父母は其篤信者なりし故、彼も亦自然之に歸せうとしたが、聰明の質決して妄信を以て甘んぜず、切に妙法の玄義を尋究し、四十一歳の時、西山等持院東嶺禪師の法座に參して題目も名號も我心の外ならず、即身金色の彌陀なりと見得し、さては鳥には鳥の妙法あり、人には人の妙法ありて、一天四海皆歸妙法の理を悟り、更に東寺の靈元禪師に道交し、後手島堵庵に親接し、竟に心學を以て世に立つとなつた。特に師堵庵の命に依つて江戸に至り、(寛政三年)神田相生町に參前舎といへるを設けて、其扶殖を務め、頗る近易懇篤に辯述し、其の足跡は近畿、東海、北陸に及んで、心學の興起に對しては最も大功があつた。著書に、道二翁道話がある。先づ道を曰、雀はチウ、鳥はカア、鴛は鶯の道、鳩は鳩の道、君子其位に素して行ふ、其形の通り勤めてをると也、是天地和合の道にして、其心普萬物而以、無心ものなり、是神道也、又儒道也、又佛道也、此外に道と云ものなし、本來三教は一にして、又三教なきに至る也。聖人なる者は畢竟此天地と同根同性なる故、一切萬物を心として、又他に別の心なし、廓然なる大公、物來れば順應す、虛靈不昧也、平等

一枚也。只學問に依りて此理を知り、此境に達せば、人も一個の小天地也。人は天を心として土を形とすると皆同一也。かの三世と云は此形骸に對しての名のみ。心においては不可得にして、三世を超越するもの、只今ばかりに於て、此心の虚空同體にして衆生本來成佛なる旨を會得すれば足れり。此に至れば己れが、はな。尤て我なし。天地萬物を同じ様に育つる也。而して天恩、國恩、師恩、親恩の廣大なるを知りて、それ、職分を守り勤むべしと爲し、女子に對しても一に心事を正しうして親大事、夫大事、家大事にして、舅姑に對しては看護從順、到らざるなかるべく、儉素貞節なるべき様、其の最も陥り易くして、而も其の最も恐るべきものを辭を盡くし意を用ひて警戒した。其所説敢て卑俗に流れず、以て能く下民の蒙を啓き、又士人の惑を解くに足る。傳へ云ふ、參前舎常に都下の士女老弱を以て充されたりと。以て其の感化する所淺からざるを想ひ見ることができる。道二の子に道輔といふ者があつて、講説最も巧みて、父の名を辱しめなかつたといふことあります。

道二と同時に京都に布施松翁名は道矩あり。堵庵等に就て心學の堂奥に登り

神儒釋老の言説の外俚言謠曲等を引用して、道の外物なく、物の外道なき旨を講述した。其の著に「松翁道話」「松翁獨語」あり。又盧白齋「雨やどり」「雨の晴れ間」脇坂義堂「御代の恩澤」「堪忍の守」「忍徳教等」あり、塔庵の子に上河正揚(水)あり、正揚の子に上河明あり、又孫に上河精及び手島毅庵あり、幾多の同門と戮力して斯道を普及した。尙松翁の門人(柳)鎌田鵬(柳)八宮齊等ありて、諸師の講話を出版して、各々功を立てる。

其後、柴田鳩翁名は享字は陽方天明三年||紀元二四四三年、西洋紀元一七八三年||生天保十年||二四九九年、一八三八年||卒、壽五十七歳あり、京都の薩埵徳軒に學び、三都を始め諸國に講説して上は侯伯より、下は農商に至るまで、心服する者が多く、最も卑近適切なる實例を列擧して自然に反省感悟せしむるの妙を得てをつたのである。門人源龍天(錫)の贊に曰、柴田翁中歲明を喪てより、耳を以て眼と爲し、人を以て書と爲し、六經の語を誦し道義の旨に通し、以て性命の理を説て、人をして其の心を知り以て惡を窒き、善に趨かしむと。其の著に「鳩翁道話」がある。然し爾來漸次鄙俗に流れ諧謔に陥り、殆ど寄席の講談のやうな弊風を惹き起し、小野蝠翔齋

俗稱は治右衛門、字は弘度、著書に二十四年を費やしたる「教訓古今道しるべ」あり、與田頼杖名は在中、俗稱壽太郎、天保年間に盛んにして、心學道の話の著あり、壽福軒眞鏡、文政六年より弘化四年に至る廿五年間著述を事とし、主從心得草「心學日用心法鈔」を出だせり、及び平野橋翁又檀園主人と號す、寛政六年||紀元二四四四年、西洋紀元一七九四年||生、慶應元年||二五二五年、西一八六五年||卒、壽七十二歳、門人に賀屋就義あり、著書に「百席道話集」一名「耳袋」及び「心學孝行種」あり、さては近代の高橋高節等に至つては、太甚だしくなつて、野俗となり、落語となりて、以前の品位面目を失墜する有様となつてしまつた。現今にては、もはや之れを口にする者は稀れとなり、余の聞く所では、東京では上野櫻木町、下谷練堀町邊に高座の上に説法をつゞけてをる者があるといふとである。憐れむべき末路といはなければならぬ。尙舊來設立せられた學舎を擧ぐれば、京都に明倫舎(現存)、五樂舎、觀行舎、心學社(心學心得草を出板せり)等あり、大坂に茶寛舎、河波舎、靜安舎(以上天滿、教厚舎あり、玉道に等あり)、江戸には參前舎(現存、之を川尻、寶徳隣舎、自謙舎、開成舎、慎行舎等があつたのである)、尙支舎に至つては、諸方に散在して、其の名も其の數も明かにはわからぬ。尙著書に

天保十四年刊行の古賀兵藏の「教訓心學圖會」及び根岸住人何某の「主從心得之事」等があり、近年足立栗園氏編纂校訂、開發社發行の「日本道德叢書」中に若干あり、更に又赤堀又次郎氏校訂博文館編纂發行の「心學叢書」中にも幾多の裨益あり興味あるものが網羅せられてをります。

要するに、心學の名家は皆商家から出たものであつて、互に因たり果たりて、自然に平民社會に滋蔓して儒教が手を着けず、又佛教が徒閑にしてゐた處には、凡そ此の道德教があつて、其の缺損を填補して、深く感化を興へてをつたのである。然るに今日においてもやはり平民社會下層社會には此の如きものが非常に必要であるけれども、余は不幸之れを見るとがてきぬ。實に残念である。どうか方今の時代に應ずるやう、多少改良して大いに用ひて善いものと考へてをります。

第十一章 神道派

第一節 山崎闇齋の學說

(小傳) 闇齋姓は山崎、名は嘉、字は敬義、小字は長吉、又嘉右衛門といひ、闇齋は其の號であるが、又垂加とも號した。後水尾天皇の元和四年(和元二二七八年、德川二代將軍秀忠の時代に京都で生まれた。父は清兵衛といひ、木下侯の臣なりしも、致仕の後京都にて醫を業とし、淨因と號して神を崇び、又佛に歸してゐたやうである。闇齋幼より癡癡て人の手に合はなかつたからして妙心寺の小僧とせられ、絶藏主と名づけられたのである。が、豪邁の性質はます／＼其の鋒鏘を露はし、遂に衆僧に忌まれて放逐せられうとしたのを、幸にも土佐の公子某に見込まれて伴れ行かれ、元と疎石禪師國師の開創にかゝる高知の吸江寺でやはり禪僧として勉強した。然るに當時同地に谷時中、野中兼山、小松三省等の朱子學者ありて、其の才器を賞して、私かに四書及び程朱の書を教示したが、乃てとう／＼善學して儒者となつた。闇齋一卷は此の時に成り、専ら朱子に依據して大いに佛教

を排讖したのである。忽ち土佐侯の讒責に逢ひ遂に放逐となり、據なく京都に去りて教授を始め又研鑽を積んだ。漸次門人多く集りしが、其間常に兼山の庇護を受けたのである。蓋し意氣相合するものがあつたからであらう。然れども其の性嚴厲剛直なりしを以て、自尊の念を高むるのみにて兼山初め諸門人の忌避する所となり、止むを得ずして江戸に上りしが幸ひに二三侯伯の知遇を受け、特に最も會津侯保科正之の景慕する所となつてゐた。四十四歳伊勢太神宮に詣て、大宮司精長に中臣祓を聴くに及んで大いに我國體の尊重すべきに心附き、更に惟一神道の發揮者たる吉川惟足の高弟服部春安に依りて神道の信奉すべきを感じ、遂に惟足につきて其の精要を了得し、また社家神道の主張者たる出口延佳又は度につきて其の蘊奥を究明し、終に靈社を京都上御靈社内に建てて兩神道の共に宋學又は易學を斟酌せるもの、傳統を承けて從來習得せる儒佛を應用し以て垂加神道といふ新神道を唱道したのである。之れが實に關齋の功業であります。靈元天皇の天和二年紀元二三四二年四曆一六八二年將軍綱吉の初年に歿した。享年六十五。門人祠を下御靈に建て、垂加社と號した。儒學に關する

著書も多いが皆定説といふわけにはゆかぬ。神道に關しては『垂加文集』『續垂加文集』『土金傳』『龍雷傳』『風水草』『風水抄』『自從抄』『天津神籙磐境極秘書』『神代風葉集』等がある。

〔關齋學の特徴〕。關齋は多年朱子學に親炙しゐたるだけに、其の學說の大半は殆んどそれと同歸である。換言すれば朱子學を以て神道を立した者で、即ち神道化し日本化したる朱子學である。から、到底それと大差はないのである。實際的方面ばかりが異つてをるけれども、理論的方面は全然一致してをる。これは其の著文『會實錄』及び『仁說問答』につかば一目瞭然であります。

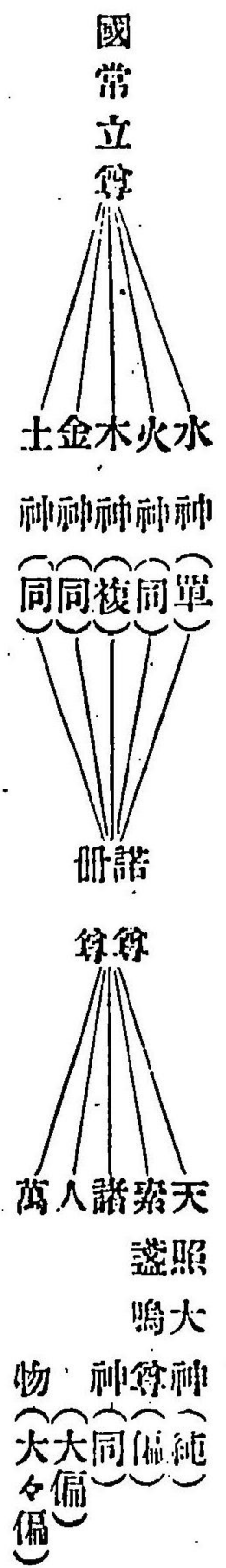
〔宇宙及神論〕。先づ宇宙を解するに、やはり理と氣とを以てし、而も理を以て萬有共通の單源とし本體としてをる。其時の理は氣を含蓄してをるので、元來理氣は二にして一、又一にして二といふてをるのであります。二元論の様ではあるが、證し究めれば即ち一元論となる。現に彼は天地之間一元而已矣と申してをるのである。さて其の理が活動變化し流通運行して自然に妙用ある所よりして、之れを尊奉して神と稱するのである。つまり理即神なり、理一なるが故に神亦一（理一）て

ある。一神ではあるが分布することは猶一理の分布するが如くて以て八百萬の神々(分殊)となる。

理(含氣)——一神(理)——妙用(國常立尊)——八百萬神(分殊)分布(天地萬物)

即ち天地間の諸神は一神の分身同躰である。其の唯一神なるものは則ち絶對なり恒久なり不變なりて無限の功德を備へてをられる。是れ即ち國常立尊である。實に至純至善造化の元神である。國家の成立する本源なるよりして其の名があるが又天地の中間を貫き君臣の體用を合する所よりして天御中主神とも稱す。關齋は此において親房卿を始め兼俱惟足等の説を承けて五行説を應用し來り國狹縫尊といふ水神を生み次には豐樹淳尊といふ火神を生み更に泥土煮尊沙土煮尊といふ木神次に大苦道尊大苦邊尊といふ金神其の次には而足尊惶根尊といふ土神を生まれて萬物生成の元素が備はつたのである。特に水火は單純であるから單獨神であるが他は複合であるから兩神ある。此の如くして遂に伊弉諾尊伊弉册尊の陰陽二神が現はれて來られて乃て天地人萬物は次第に生出したのである。五行神の生來と共に氣は次第に顯現して其等萬物の形質を爲し而も種々異

様のものを生ぜしめたのである。蓋し氣とは活動流行其物をいふとしてをる。抑も元神國常立尊の國は土であり立は金であつて即ち既に土金の二元素を兼有せる至上の靈神とせられてをつて最も根本的なる氣を含蓄してをることを示しをるとする。兎に角此の如くして宇宙は成り萬物は生じたと説いてをる。

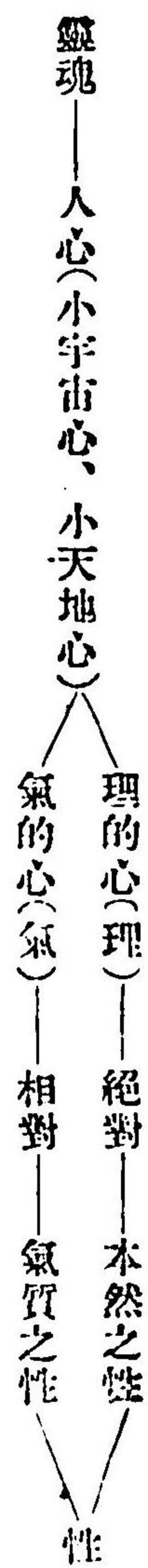


《人物論》人につきては如何といふに。關齋はその諸冊二尊より生せられたる天照大神は身化の神、人躰の神の最初で、天御中主神の現はれたる高皇產靈神、神皇產靈神とも同靈同躰にわたらせられて至中至秀なる御方としてをる。然し御同胞なる素戔鳴尊以下の諸神は何れも氣の偏向を免れずして性の善惡を生じた。況して常人は尙更のことである。況して萬物はいふまでもないことである。其の外形にも非常に逕庭があるが其の性質にも大變な差異があつて、次第次第に醜汚になるのである。本來神人一であり、人物亦一なるものであるけれども氣あり

質生するにつれて、到底一なることができぬ。元神中に既に其の原因が含蓋せられてをるのである。至中至秀たる天照大神も女体である。素尊に至つては顯著である。又直系の神と傍系の神々とは主従の關係を有せられてをる。それ〴〵階級があり種類がある。それはどうしても免れられぬのである。マア先天的であるから致方がない。此の如きは寧ろ自然の秩序として固く守らなければならぬ。別して日本はかゝる元神直系眞傳の天照大神や神武天皇を皇祖としたまふ神國であるから、尙更である。それは勿論そうとすべきであるが、然し一身を修むる上においては、吾人も亦かゝる神聖なる元神より生じ、實にそれを本體としつゝある者であつて、神々には及ばずといへども、萬物に比しては秀妙なる靈質を有してをるのであるから、此に省みて、各々本に還り性に復るべしと説いてをるのであります。

〔靈魂論心理説〕。それにつき人には靈魂あり、皆元神より稟け得たるものにして萬物の上共に不滅である。之れが精神たり又意識たるなり。然れども元神の大靈に比すべくもあらねど、其の小靈として、それ〴〵に妙用を爲すものである。而

して其の作用の聚合を以て生成と稱し、離散を以て死滅と稱す。其の死滅の後はその少宮又は夜見の國、即ち天國か地獄かに行くものと説いてをる。よほど宗教的であつて、此の邊は朱子學には見れない所であります。此の如きの靈魂、又之れを人心といひ、其の出處よりいへば小宇宙心なり、小天地心なり。やはり理氣の妙合にして、理的心と氣的心とに別つことができ。理的心は宇宙の一理を稟けたるものにて、絶對的である。之に對して、氣的心は宇宙の一氣を稟けたるものにて、相對的で、善惡美醜皆之より起つて來る。更に又前者を稱して本然の性、後者を稱して氣質の性とし、合併して單に性ともいふとしてをる。



而して其の本然の性は天賦の本智といふべく、知覺の生ずる所なれば又良知と稱し、其の發する所を良能といふので、即ち今日のいはゆる良心にして、以て道德的判斷の標準となるものである。故に又之れを明德と名づけてをる。其の動いて發するを情といひ、孟子のいはゆる四端の心の如き是れなりとし、更に之れを遂行せ

んとするものは是れ意なりとす。

本然之性——良知良能(良心)——明德——(四端之心)兼意

且つ又心の徳につきて仁義禮智を立てゝをるが今仁説問答に依りて其の大略を表示してみませう。

天地之心——元亨利貞
人之心——仁義禮智
生物之情——仁(愛之理)

即ち天地の心は元以て統せざるはなき通りに、人の心は仁以て包まざるはないのである。人心即ち仁といふべきで、愛の理であり、生物の情である。尙更に辨別すれば左の如くである。が大抵朱子と大同小異であります。

理——性之徳。
情——性之發。

而して明かに性善説を執つてをります。又仁と愛とにつきては、

仁(理)——性(徳)。
愛(發)——情(用)。

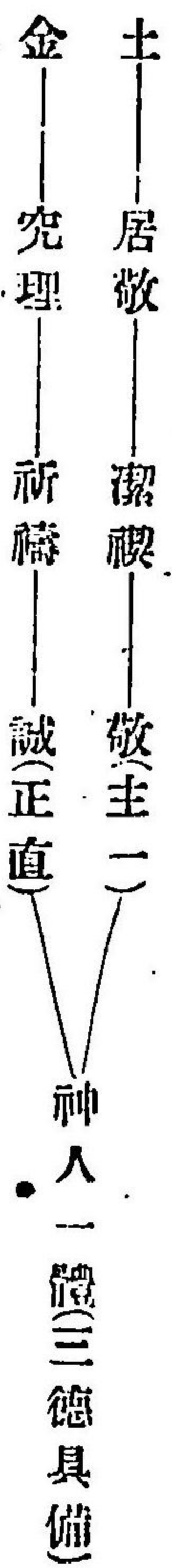
とし、或は仁は生の性、愛は其の情にして、孝悌は其の用、公は仁を牀する所以とし、或は仁義につきて、仁は平等的なるも差別的にして等級あるは義の事なりといふ朱

子の意見と同様であるらしむ。

〔倫理説〕さて其の倫理説を配せんか。畢竟するに天來又神來の良心のまゝに意思を自由に働かしめんか、虚靈不昧、清淨無垢にして即ち天理發顯して神明と和同することができるのである。而して其の良心の清明を蔽ふものは即ち氣質の偏向にあるのである。故に本來善なる性も之れがために變して惡となるのである。是れ又理氣の命數然らしむる所にして、自然の運といふべき事柄である。是れに對して吾人は如何に處すべきかといふに。一は積極的又は客觀的方法、即ち格物究理を爲して、固有の本智を明かにし、一は消極的又は主觀的方法、即ち居敬慎獨を爲して元來の天性を保つやうにし、以て惟神は天地の心、惟人は天下の神物にして、其の心は則ち神明の含なる所以を見得して、而も之れを存存すべきである。而して是れ實に元神以來大神等の傳受したまふ所の法にして、いはゆる土金の教である。土とは是れ敬と同訓で本來敬の徳を示すものである。金も亦是れ智の徳を表はすことは勿論であつて、即ち理となる。つまり居敬究理は本邦古來の神道に外ならぬものである。故に曰はく、夫我神國傳來唯一宗源之道在乎土金とす。

又曰はく天地之所以位、陰陽之所以行、人道之所以立、其妙旨備于此訓と。之れに依りて彼は天照大神の先導を爲したる、猿田彦神(俗に甲申様といふ)を重んじたのである。

〔行儀説〕。此の居敬究理に對して、開齋は大いに潔禊及び祈禱を切要とし、齋戒沐浴以て身の汚穢を祓ひ去つて清淨ならしめ、又靜祈默禱以て心の邪惡を去りて主一となりなば、即ち氣より來る一切の醜惡を斷滅するに至り、其の極正直を本として主一となり、此に誠敬兩つながら完全して、自然に神人感通して、相合一することのできるのであると説きました。此に至つては人は生れながらにして神となり、宗教上の覺者となると共に、又實に道德上の善人となつた者であります。是れ即ち宗教的倫理説の極致と申すべき所である。かしこくも天照大神の皇孫に賜ひたる三種の神寶は、智仁勇の三徳を表はしたまひたるものなるが、是れ實に此の如き完全なる覺者善人に具備する所の神徳である。中にも鏡は主なり、智は本なりと謂ひて、我胸中清淨にして三種の徳になれば、我胸の高天原に日神の御徳留まる也と稱するに至つた。



時として此の智仁勇三徳の外に、義の一徳を加へて、勇と共に寶劍の示さるゝ所として、更に敬と義とを以て全徳とし、敬以直内、義以方外とも曰ひ、我身を覺るは敬なり、他人を方にするは義なりとして、をることもあつて、敬義學の稱あるほどであります。

〔結論〕。彼の學説は此の如くして、以て自ら神道となり、現世にては勿論、死後も亦神人一體にして、靈明恒久なりとしてをる。其の神道は即ち垂加神道と稱した。それは神宣に、神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲本とあるより來りたる號とす。然り而して、其の神道的道徳として、最も敬神と尊皇とを主要とし、祖先崇拜の思想と君主尊重の思想とは相合一して、祭政一致、忠孝一本の道徳説を主張し、明かに國家至上主義を唱道したのである。而も上代の神道を無上の標準とし、神道即人道といふが根本思想である。即ち君主法は自然律に外ならぬものと考へたのである。されば吾人は日徳を拜し、神國を仰ぎ、神より受けたる良心を穢るゝなからしめ

以て忠孝の大義を全うすべしと説いたのである。之れがつまり關齋の道德思想の簡要といふべきであります。

二九〇

〔餘論〕。其の他、陸王の知行合一論に對する知行分別説あり、又佛の色即是空説に對する倫常論あり、又師道論等を述べてをるが、いづれも嚴正にして、其の人物と相照應するものである。其の逸事は多いことであるが、先哲叢談又は行狀圖解等に委しいから此には省きませう。兎に角、關齋の學風は其の感化する所偉大であつて、後年離反したとはいへ、佐藤直方、淺見綱齋、三宅尙齋、羽黒迂庵名は成實字は養浩室鳩巢に教授せり等が出て、世教道德に裨益を興へ、殊に綱齋は尊王論に對し貢獻する所が少くなかつたのである。神道家においても正井宗順、正親町公通、鴨祐之、跡部良順等録々たる者が相接いで出てをり、兎かに皇政維新の晨雞となつたもので、其勳業決して忘れてはなりません。

第二節 眞淵、宜長、篤胤等の學說

〔概説〕。徳川氏時代において自由研究の學風が起り、儒學についても佛學についても次第に新生面を開くに至つたのであります。特に歴史的討究と復古的論述と及び實際的解説との三潮流が最も盛んであつて、儒には藤樹、蕃山、素行、白石、仁齋、東涯、徂徠、益軒及び水戸の君臣達が各々新旗幟を翻へしたのである。同時に佛にも亦靈空、鳳潭、覺齋、普寂、敬首、戒定、慈雲等はそれ／＼一代の風潮を代表するに足る人物である。此の機運に乗じて歌學者が新研究を始めて、大いに古語古歌の眞價を紹介したのである。江戸の戸田茂睡、大阪の釋契沖、下河邊長流、其の先登である。中にも契沖の萬葉集註釋は大勢力となつたものであります。而して之れについて國學といふものが唱道せられ古道が發揮せらるゝ様になりました。其の劈頭に立つた人は荷田春滿カネツツミ又は東應トウオウであつて、即國語國文の研究を基本として日本國殊に純然たる日本人の道とする處を説き明さうとした者である。随つて從來の神道は唐宋諸儒の糟粕か胎金兩部の餘瀝であつて、之を排斥せなければならぬ、眞

實正確なる國學神道を顯彰すべしと呼號した者であります。其の嗣の在滿も亦京都稻荷神社の祠官を襲ひつゝ古道の顯明に努めたのである。眞淵等實に此の人に依つて起つたのであります。

岡部眞淵

家號は縣居本姓は賀茂縣主で俗稱は三四後衛士といふた。元祿十年紀元二三五七年東山遠江國敷智郡伊場村に生れた。太宰春臺の門人渡邊蒙闇につきて儒學を修めしが三十八歳で春滿に濱松の旅路に逢ひて直ちに其の門に入り四年間國學を修めて古語神道の精要を究明したのである。後江戸に出て、講話を爲し五十歳で田安侯に仕事し六十四歳まで勤続した。其間に著書が續々出來たので「文意考」「冠辭考」「萬葉考」「歌意考」「國意考」「祝詞考」「語意考」等澤山である。又門人も三百人以上あるが中にも村田春海、加藤千蔭、塙保已一、荒木田久老等が著はれてをる。然し國學者神道家として能く師の壘を攀した者は本居宣長である。明和六年二四二九年後關町七十三歳で歿した。眞淵は非常に儒を排斥したのであるが其の得意とする所は歌文にして而も擬古的である。其神道に關する主なる著書は「國意考」である。今之れに依つて大略を

述べませう。

日本は支那の如く細かく規則的理窟的に支配することはなくして唯天地の心のまに／＼治めたまふことが古道である。元來物は理に執着するときは死物同様となるものであるけれども天地と共に行はるゝものづからの事こそ生きて働くものなれ。文字の如きものづからなる天よりえたるものがよい。梵宇梵語の類は天地の宇、天地の聲である。何事も爲作造作を交えず天地自然のまゝに順つて行きさへすれば直ぐ正しく治まるものである。老子の無爲の説は誠に天の下の道に叶ひ侍るものである。「我國の昔の様はすべらぎは日月なり、臣は星なり、臣の星として日月を守れば今もみること星の月日をおほふことなし。」かくさへすれば世の中は平らかに治まるのである。五常といひ四時といふ自然にあるものなれど角を立ていへば形式のみになつて内實を失ふ。畢竟我すべら御國の古への道は天地のまに／＼丸く平かにして立つたもので上下諸共に質素にして、打和き親しみて君臣と親子とを兼ねてゆかなければならぬ。さる時には此國のならはし、食ををします、私家をも顧みぬほどとなるのである。これが又武の道で

ある。こゝにいふ簡單なる倫理説であるが、要するに先天的良心のまゝにして皇國に至誠の真心を盡くすべしといふ主義でありました。然し非難すべきことは、人類を以て蟲と同様に言ひ、甚だしきは、人は萬物のあしきものとかいふべきとさへけなしたること、又異母の兄弟までは婚姻差支なしと辯じたこととであります。前者は不理であり、後者は不倫である。餘りに自國を讃め過ぎたために來た論で、むしろ眞に受けぬ方がよからう。

本居宣長

幼名富之助、又彌四郎、後健藏と改めた。享保十五年紀元二三九〇年中御門天皇、將軍吉宗時代伊勢松坂に生まれた。平頼盛の後裔である。夙に儒學を修めたが、二十三歳京都に出て、慍窩門の四天王の一人なる堀杏菴の曾孫堀景山について國學をも併せ學び、又醫術をも習つたが、二十六歳名を宣長と改め、契沖の「百人一首改觀抄」古今餘材抄等を見、私かに古典の研究に従事せんことを期し、更に眞淵の「冠辭考」を見て、愈々感奮する所があり、三十二歳遂に郷里にて醫術開業中、親しく眞淵の來遊に接して、日本の古き道を極むるには古事記を基礎とすべし、余は老年ゆへ、汝勉強して其の傳を作れとの勸諭を受くるに迫んで、乃ち其の門に入り

て師の言に依り専心古事記を研究した。三年目よりして古事記傳の稿を起し、常に江戸に在る師に問ひて着々其の歩を進めたが、三十五年かゝつて出來上つた。六十五歳で紀州侯に和學を講し、七十二歳で京都にて暫時公卿等に講釋したが、故郷に歸る間もなく歿した。享和元年二四六一、光格天皇、將軍家齊の時代である。其の著述夥多であるが、神道に關しては「直毘靈」を始め「葛花」「宇比山踏」等であり、經濟策は「玉くしげ」に依つて知ることができる。いづれも彼の眞率なる學者的人物たるを示してをる。五十三歳頃より家名を鈴の屋といふた。其の門人亦甚だ多いが、養子の大平を始め藤井高尙、それから歿後の門人たる伴信友、平田篤胤等が著はれてをる。

さて其の學説はといふに。世界萬國は皆天照大神の大御徳を蒙らぬ所はないが、別けて日本は其の直系の御子のしろしめす國であつて、人爲を加へず、神代の天然自然のまゝに大らかにしろしめしたまふのである。之れを神の道といひ、舊紀には「惟神者謂隨神道亦自有神道也」とある。元來日本は議論がましいことは一切なかつたので、道といふ言葉もさらになかりしなり。かの支那にて道などとい

ふて入釜しく騒ぎたつるは本とく正しく、ないからのことであり、又之れありしがために反つて小賢しくなり悪くなつたのである。策畧であつて、天真ではない。日本のは天真である。道といふ名目はなかつたが、自然に道は備はつてをつたのである。後世儒教など入來りしたため、孝徳天皇以來之れに對して神道といふ名稱が出来たのに過ぎぬ。抑も天地間の事は悉皆神の御心で、善神(直毘神)あり惡神(禍津日神)あるに依つて神變不測である。因果とか天命とかいふのは私説妄見である。日本は此の御國を生成たまへりし神祖命親傳の皇統を以て大君に頂く所であるから、徹頭徹尾神なれば吾人が善惡是非の限りにあらず、只ひたぶるに畏み敬ひ奉仕(ほうじ)せしむるの道なる。其の道や實は天地萬物と共に高御產巢日神の御靈より成り、神祖諸冊二大神が始めたまひ、天照大神の受け傳へられたもので、吾人は敬服信順より外にすべき様はないのである。即ち上下貴賤の別は嚴しくして、臣下はつゆも私心なく、神を祭り祈りをし、ほどくにあるべきかぎりのわざをして穩(なご)しく樂く世をわたらふほかなし。之れが皇國魂(すめらみたま)又大和魂であると申した。つまり自然主義、樂天主義であつて、老莊に似てをるけれども、神意を主とし本として説を立

て、いざるから自ら別様である。即ち國家の尊嚴にして皇室の神聖なることを旨として、祈禱祭祀に依りて邪心を除き、天真の良心を發揮すべしとしたものである。やはり國家至上主義を以て根柢としたものといはなければなりませぬ。

平田篤胤。 姓は本と大和田で、幼名を正吉、安永五年紀元二四三五年、後桃秋國元二四三五年、後桃秋田元二四三五年、後桃秋に生まれた。幼より學を好み、儒を中山菁莪に醫を叔父柳元に學び、名を胤行と改めたが、二十歳昂霄の志を抱いて江戸に出て、具に艱苦を嘗め、偶々板倉侯の知る所となり、常盤橋目付となり、幾許もなくして山鹿流の兵學者平田篤樞の嗣子となり、乃ち平田篤胤と名乗つたので、恰度二十五歳の時である。三十一歳に至り、偶々宜長の著書を見て、大いに感起し、爾來國學神道の皇張を以て任ずることとなり、名を其の門に列ねしも、師は其年歿して、面會の機なかりしが、獨學で研鑽を重ねると共に、續々著述を爲し、家號を菅能屋、後に伊吹の屋といふた。五十三歳で致仕し、上京して自著を奉獻し、紀伊伊勢を歴訪し、江戸に還りて、専ら著作と教授とを事とした。搢紳侯伯等門下五百人に上り、其勢盛んとなりしが、幕府の忌む所となり、郷里に隱退し、著作の絶板を命ぜられた。然し間もなく宥免さ

れて上京し、講述もしたが、天保十四年二五〇三年、天保六十八歳で歿した。神祇伯より神靈能眞柱大人の謚號を贈られ、又靈社として待なされることになった。著書は「古史成文」「古史徵」「古史傳」を始め、其他儒佛を罵倒した所の「印度藏志」「出定笑語」「俗神道大意」など非常に多いが、神道に關しては「靈の眞柱」「鬼神新論」等がある。

彼は古來稀に見る所の博識家で、當時の書は殆んど見ざるなき有様で、隨つて筆鋒諸方面に向つて、而も犀利又該詳を極めてをる。彼の特長は罵倒にあり、破壊にして、建設でない説明ではない。元來春滿眞淵宣長等皆多少罵倒の文句を有してをるが、篤胤は其の極に達した者である。多くは時勢の然らしめた所であらう。而も直接間接に自家の意見を宣揚してをる。「靈の眞柱」の如きは、尤も眞率なる述作である。其の大體の主義は日本を根本とし、中心として、世界萬國皆之れより生出し之れに従屬すべきものとしたもので、一一證據を擧げて論辯してをる。即ち極端なる日本主義を唱道したのであります。曰はく、「我が皇大御國は萬國の本つ御柱たる御國にして、我が天皇命は萬國の大君に坐す。如何となれば世界萬國も

共に均しく天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神の産靈、即ち生生の徳に依りて成れるものなるも、我が日本は獨り諸冊二神の生成し賜ひ、天照大御神の生坐し賜ひ、皇御孫命の承へに知看す御國で、四海の宗國たる所であるからである。又大地の頂にあるにてもわかる。然し和魂荒魂の二魂があつて、一は天照大御神となり、他は速須佐之男命と現はれたので、神も人も各々某々にこの二柱神の御靈は賜り有るなり。即ち善惡の兩性は先天的に神より授かりをるのである。而して夙に天照大御神は大直毘神に依りて禍事を直されたので、代々の天皇命は之れを承けついで大祓して政をしたまふのである。之れが即ち惟神カミナリなる道である。諸冊二神は常に陽に陰に、天に泉イハヒに、日に月に在りて此の國を守護して、繁榮ならしめらるゝのである。又人は元因は神の産靈に依り、風火水土の結成に依りて心身共に出來たのである。死せば亡骸は地に屬する水土となりて顯在し、神魂は天に屬する風火となりて放去するやうである。其の神魂は汚穢特に火の汚穢を忌み、常磐に此の國土に居りてそれ〴〵功を立つるものである。即ち死すとも死せざるのゆわれがあるのである。まして生きてをる中は能く萬國の祖國たる御國なることをと

うとみ萬國の大君たる天皇命をあがめ奉り、又自己も其の後裔であり一員であることを思ひて、生來神受の本性自性の正直純實なる心を推し擴げて、此の靈の眞柱を太くいかめしく底磐根に突かため雄々しく直く潔くとのみ力め、忠君愛國の誠意を盡くし、以て天神祖神等の恩頼に報ひ奉るべきである。又、亡らむ世まで天翔ても子孫の勇を助け護らむことをぞ思ふべく、死ての後も功の有らむこそ神の眞の道にはかなふべけれ。是れが古傳たり常道たり、而も又萬國に通ぜしむべきものであると説いてをります。畢竟天眞爛漫なる本能に重きを置き、極端なる國家至上主義を執持し、之れを世界に擴充せんとした者といはなければなりません。其の社會に及ぼせる影響の深くして、明治の新政を催進したるの功少しとせぬのである。門人には權田直助、野々口隆正、三輪田元綱、六人部是香、丸山作樂などの人達がある、皆嚴厲峻直なる尊皇愛國者でありました。

水戸派 水戸派の學者、即ち光圀卿、義公、齊照卿、烈公を始めとし、安積澹泊、藤田幽谷、同東湖、青山延子、同延光、會澤正志等は、皆歴史の見地の上よりして、崇神愛國を以て國民古來の常道とし、忠孝一本の道德思想を以て強固なる國家主義を立てた者

であります。其の入る所は關齋の哲學や眞淵、宜長、篤胤の語學にあらずして、主として史學にあつたのであるけれども、其の歸する所は相一致してをり、而も時としては出入共に關齋や篤胤と同類の所がある。光圀卿が大日本史を著はして大義を萬世に明かにせられたりとはいふまでもなく、其の末孫齊昭は熱心に尊王を首唱して神道を發揮した。弘道館記及び告志篇等により、其の大要を曰へば、上古神聖極を立て、統を垂れ、天地位し、萬物育す、一に是れ天地の大經を以て道とせられたるに由る、而して聖子神孫も亦人に取りて以て善を爲すを樂みとせられ、唐虞三代の治教を齎りて、皇猷を賀け斯の道いよく大に、いよく明となれり、忠孝二なく文武岐れず、學問事業其の效を殊にせず、神を敬して、國家無窮の恩に報ゆるは、是れ臣民の神皇在天の靈に對し奉るべき道なり。としてをる。澹泊齋は大義名分を重んずるの餘り、安倍仲磨が異朝の官爵を受けたるを以て、皇國の罪人となすに至つた。幽谷は特に日本の國體を尊奉して、天祖統を垂れ、天孫繼承し、三器を奉じて以て宇宙に照臨す、皇統綿々天壤と窮りなし、實に天祖の命する所の如し、是れ神州の四海萬國に冠たる所以なりと曰ひ、其の門下正志は、新論を作りて、佛敎を非議し

神道を發顯し、明かに尊皇攘夷の精神を詳述してをる。即ち神州は大陽の出る所、元氣の始まる所、天日の嗣世々宸極を御し、徳を玉に比し、明を鏡に比し、威を劔に比し、天地の大養たる君臣の義と、天下の至恩たる父子の親とを並立して、忠孝一本の教を立て、祭政一致、天人一心、文武一途たるべく、以て光を覩し、烈を揚げ、國威を海外に宣べ、夷狄を攘除し、土宇を開拓し、天祖の貽謀、天孫の繼述を翼賛し奉るべしと爲し、「觀侮策」の如き亦見るべき書である。幽谷の子、東湖は特に顯著なる人物にして、「苟明大義、正人心、皇道奚患不興、斯心奮發、誓神明、古人有云、斃而已」とも、「尊神之義、明則皇室自尊、異端自衰、忠孝之教立、而神州之道興矣」とも曰ひ、又「明皇道、資儒教、以臨天下」、「忠誠尊皇室、孝敬事天神、死爲忠義鬼、極天護皇基」等と呼號し、更に「弘道館記述義」において、天神は生民の本、天地萬物の始、而して祭祀の道、孝敬の義は天祖より起り、天祖の靈は赫々たる太陽、巍々たる勢廟に在り、之れを尊ひ、之れを奉じて、仁厚勇武なるは、是れ天を敬し、祖に事ふるの義をもかねる所以なり、元來君臣一體、祖孫一氣にして、忠孝一本なれば、報本酬恩の志を厚くし、文武を勵み、仁義を務め、尊皇攘夷、以て盡忠報國の誠を致すべしと説明してをる。其の他、延子延光の如きも國史の研究

に依り、神祇の尊嚴なること、皇朝の神聖なること、忠孝の肝要なること等を述べてをる。皆共に神州の道を奉じて、國家的道德を鼓吹して大功を奏したものであります。近代に至りても、神道家に賀茂規清、神習教又は鳥傳神道、井上正鐵、禊教、黒住宗忠(一本教又は黒住教)など種々の人物が出て、各々神道を宣布するに努めてをるが、然し雜駁なる分子を容れて、よほど宗教臭味を含み、甚だ俗化してをるのは惜むべきことである。どうか國家的道德として、神道思想又は御國魂、大和魂を維持振大したいことと考えます。

結 論

此に翻つて日本古來の倫理思想の起源及び發達を大觀するに、上古にありては全然家族的觀念より成立したもので、個人てふ觀念は殆んど現はれずして唯専ら家族主義であつたが、後漸く國家的組織の成ると共に他律的道德が加はりて、乃ち家族的國家主義ともいふべき、極めて強固なる國家生主義を以て目的としたので、忠孝を最上の徳とし、三種の神器を其の標準とした。然し太甚固陋である。儒教が來て其の思想は愈正確となつたけれども、其の主義は猶偏狹であつた。更に佛教入るに迫んで、平等主義、寂靜主義は始めには大衝突大混亂を惹起したが、後遂に一方において宗教と倫理との調和連接をしたと共に古來の國家主義を稍寛宏にして、人類を認め世界を顧みしたのである。降て江戸時代に至り、諸多の學說相競ふて起つて、倫理界は大繁昌を致したが、大抵やはり偏狹なる又強固なる國家生主義、國家利己主義か國家至上主義を主張したのであります。或は理論的或は歴史的に細密なる説述を盡くし、特に先天的良心説を立てゝをる。勿論、儒家の

中には萬物の生主義を唱へてをる者もあり、よほど進歩はして來てをる。兎に角此等に依りて皇政維新の事業は成就したので、皆國家の發達の原動力となつたのである。然るに智識の博洽、思想の自由を奨励せられたるの結果、東西の文物制度が混交紛雜すると共に、社會の風教は壞亂し、倫理思想も新舊相錯はり、玉石相混ずることとなり、國家主義、個人主義、社會主義もあり、利己主義、利他主義、功利主義、生主義もあり、又神道主義、儒教主義、佛教主義、基督教主義といふべきものもあり、其の説明法にも或は常識的或は哲學的或は科學的なるありて、千狀萬態であつて、國民は其の適歸する所を知らぬといふ有様で、國民德育の上には非常に憂慮すべき事柄であつた。

乃て明治二十三年十月三十日德育に關する勅語は下つたのでありまして、歴史上我が日本國は家族即國家、國家即家族てふ特種の社會的發達に依りて形成せられ、君の尊は父の親を兼ね、臣の義は子の敬を併せて、家族的道德と國家的道德と相調和し、相合同して、忠孝一本であり、又吾人が智情意の圓滿なる徳即ち良心の作用を適當に表彰する三種の神器を標準として、家族的國家主義を以て生成發達した

るものなる旨意を明かしたまひ而して家族的道德より社會的道德に及び社會的
 道德より國家的道德に説き進んであつて、一方にては恭儉にして修學習業せよと
 て個人を認められ他方にては博愛衆に及ぼし、世務を開けよとのたまひて世界を
 認めたまひ而も始終國憲國法を守り、結極は國益國威の宣揚を志として、皇運を扶
 翼すべしと勅したまひた。即ち上下相共に國家を最上位に置きつゝ、而も個人を
 も又社會をも認容する所の寛大なる國家主義を説き示されたもので、理論上實際
 上眞に日本國民道德の眞髓要領を彰明したまひたるものと申さねばなりませぬ。
 然るに十數年を経たる今日にありては如何といふに、やはり諸種の倫理主義が
 唱道せられつゝあります。いづれもよほど精到であり穩健であるやうになつて
 まいりましたけれども、偏重偏依を免れられぬやうである。大抵皆同一方
 向に進行してをるが、少しの所で違つてをり又誤つてをるやうに見受けられます
 る。やはり利己説もあれば、功利説もあり、良心説もあれば、快樂説もあり、個人主義
 もあれば、社會主義もあつて、世界に東西古今起つて來た主要なる學説は霧集して
 をるといふ始末で、相替らず雜糅混淆を極めてをる。之れを以ての故に讀者諸士

は能く此の日本倫理學史に造詣せられて、深く。勅語の聖旨を體認し、偏せず、黨せ
 ず、着實なる倫理主義を以て實行し活動し又研鑽論究せられんことを希望に堪へ
 るのであります。

日本倫理學史終

日本倫理學史正誤及修正表

頁	行	誤	正
目次	一ノ二	緒言	緒論
一一ノ八	四	カフチンニシテ 文氏	カフチンニシテ 文氏
一一ノ一	三	韓征伐	三韓を征伐
同	一〇	專門者	專門學者
一三ノ一〇	廣濟	廣濟	廣濟
同	一四	互つて	互つて
一四ノ二一	此人に儒學を教へられ	此人に儒學を教へられ	此人について儒學を學ばれ
二〇ノ一四	歴標	歴標	軋標
二二ノ一	なかつたらう	なからう	なからう
二五ノ八	興りてありし	興りて力ありし	興りて力ありし
同	九	即ち「淮南子」	即ち「列子」を「淮南子」
二六ノ八	とも説かれ	など言はれ	など言はれ
二七ノ九	「花溪堂」	「北溪堂」	「北溪堂」
二八ノ二	自得せられてゐるのであらう	自得してゐられる人の言である	自得してゐられる人の言である
二八ノ六	「莊子」	「莊子」	「莊子」
三一ノ七	葛西因是もの下	葛西因是もの下	葛西因是もの下
三三ノ三	ザワイエーが	ザワイエーが	ザワイエーが
三六ノ一四	論旨	論旨	論旨
三七ノ一四	長岡季	長岡季	長岡季
四一ノ一〇	(月讀)祭の二神	(月讀)祭の二神	(月讀)祭及び素戔嗚尊の三神
同	一二	統御して	統御せんとして、皇孫瓊々杵尊を其事に當らしめられた、所が
四四ノ一三	英語の道	英語の道徳	英語の道徳
四五ノ四	次の詔	次の意味の詔	次の意味の詔
五三ノ二	行はれ、こと	行はれたこと	行はれたこと
五四ノ四	大山祇命	大山祇命	大山祇命
五六ノ八	べき、備は……者て	べき準備は……ので	べき準備は……ので
五八ノ一	知魂	知魂	知魂

日本倫理學史正誤及修正表

六二ノ七 歷胎
六七ノ一三 ましやうか
六九ノ一二 せられたりし
七一ノ一三 花山上皇
七二ノ一四 トヨクニヌシ、ニツチ

八五ノ五 兼俱ノ上
一〇〇ノ八 其の後でヨリ下ヲ削ル
一〇一ノ一〇 又は之れから……支那倫理學史ヲ削リ、其ノ代リ

七三ノ一 タリ 煌根命
七八ノ二 任じて
同 七 紀海

一〇二ノ一一 同チ次ノ如ク訂正ス
太極(氣)理……五行(又は五氣)精——正——人
粗——偏——物

同 一〇 花道人ノ上

一〇三ノ一二 生ぜぬ
一〇一、三、五ノ欄外 程朱學派の要領 程朱學の要領
一〇五ノ一 (性太) 純 既發 (性)太 純一 既發

七九ノ一三 經營
八四ノ五 吸江庵といふを高知に建て、ヲ削ル
同 六 要するに……事に興かつてヲ削リ、ソノ代リ

同 四 或り立ち
同 同 あるからノ下
一〇九ノ八 たらしむるに至つた
同 一一 其の志業……所てあるヲ削ル
一一〇ノ七 一男一女

元來土佐には五山の一名僧なる疎石が高知に吸江庵といふ寺を創立して、それが久しく該地方の學問所たる有様であつた。そこへ大内氏の

成り立ち
それを究明することは
勿論のこと、又チ加フ
となつた

一一四ノ一一 主を
一一七ノ一四 直江山城守ノ上

二八四ノ一三 萬物の上共に
二九〇ノ七 淺見綱齋
二九七ノ六 品嘗 嘗め
三〇四ノ一〇 願かま 願は

一一九ノ一三 元慈裕
一三〇ノ二 伍せずして
一三五ノ九 「元日や
一四五ノ二 陽陰論
一五一ノ二 天地の床
一五五ノ三 を使歸ひ
一五五ノ一 適當の見
一七一ノ九 然れば即ち
一七八ノ二 一舉大ノ大ニ四行ノ一神ノ上ニツク

三〇七ノ末 別行トシテ、明治時代の諸學說の要領茲に余の意見の概略は、拙著「日本倫理學要論」にかいておきましたから、繰りかへせられたならば、好都合と存じますチ加フ

一八五ノ二 謙叔
二〇五ノ八 尾畑
二二三ノ三 重んずべし
二二八ノ二 原念齋ヲ削ル
二三一ノ二四 祖徠の學ノ上ニ(要領)ヲ加フ
二四二ノ二 從容

二八四ノ一三 萬物の上共に
二九〇ノ七 淺見綱齋
二九七ノ六 品嘗 嘗め
三〇四ノ一〇 願かま 願は

62
399

